
四神御伽草紙

のいん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四神御伽草紙

【Nコード】

N50570

【作者名】

のいん

【あらすじ】

妖や鬼といった異形のも存在する時代。百年の間ずっと若い姿のままの青年を筆頭とした、唯一鬼と戦う力を持った四神と呼ばれる者たち。そのうちの一人が行方不明になった。そんな中、薬草を煎じて生計を立てている秋月は、ある日薬草を採るために入った山の中で倒れている男を見つける。目を覚ました彼は自分の名前以外の記憶が一切ないと言う。彼との生活が始まったことで、秋月は今まで知らなかった世界に急接近することになる。

＊時代背景は江戸時代をイメージしていますが、舞台は空想の世界を想定しています。

一話（前書き）

小説タイトルとサブタイトルを若干変更しました。内容は変わっていません。

一話

家の裏山で、秋月は立ち尽くしていた。手に持っていた籠はドサリと音をたてて地面に落ち、中に入っていた野草は辺りに散らばった。ヒュウ、と生温かい南風が吹き、野草を数枚宙に舞い上がらせた。そのうちの一枚が風に乗り損ね、ヒラヒラと翻りながらまた落ちていく。そして、あるものの上に着地した。骨ばっていて、すらりと長い指の綺麗な手だった。

秋月はこの日、裏山に薬草を取りに来ていた。季節は夏の盛りで、あちらこちらで蝉の鳴き声が聞こえている。頬を伝っていく汗は、どうやら暑さのせいだけではない様だ。

——どうしてこんな所に、人が倒れているのかしら。

今彼女の目の前で横たわっている人物は、どう考えてもここで昼寝をしている訳ではないだろう。この辺りに民家といえど秋月の家くらいなもので、あとは村まで山を下りて行かなければ人気はない。秋月はこんな所へわざわざ入ってくる人を今までに見たことがなかった。しかし今、黒い着物に緑の帯を身にまとい、驚くほどに深い漆黒の髪が視線の先にはいた。

驚きのあまりしばらく身動きがとれなかった彼女だが、はっと我に返ると、とりあえず近くに寄り、ためらいつつも彼の顔の方にしやがんでみた。漆黒の髪は肩のあたりまで伸び、風に揺られてサラサラとなびいて彼の顔を隠したり覗かせたりしている。

「…もし。」

おずおずと声をかけてみても、返事はある訳もなく。息はしているので死んではないようだ。どうしたものかと秋月はため息を吐いた。見知らぬ人とはいえこうして倒れているところを発見してしまったのだから、見て見ぬふりをするわけにもいかない。とは言うものの、彼女の力ではこの人物を運ぶことは難しい。家までは彼女が一人で歩いても30分はかかるのだ。

あれこれ考えているうちに、倒れている男の体が熱いことに気がついた。ふと空を仰ぐと、頭上では太陽がギラギラと辺りを照らしている。秋月の顔も火照って赤くなっていた。この日差しに中^あてられてしまったのだろうか。そう思って、秋月は懷から手拭いを取り出した。

「少し、待っていて下さいね。」

聞こえているのか分からないがとりあえずそう声をかけ、秋月は立ち上がった。膝から下の辺りについた草を軽くはたいて落としてから、彼女は近くの小川へと走った。

それからしばらくして、秋月はまたあの男の元へ戻っていた。場所を木陰に移し、暑さにやられたのだといけなかったので彼の頭を彼女の膝の上に乗せて少しでも高くし、額には先程小川で濡らしてきた冷たい手ぬぐいに乗せて、近くに生えていた大きな木の葉で体を煽いでやった。仰向けに寝かせていたので、彼の顔は秋月にはよく見ることができた。

何て綺麗な人だろう。

秋月は思わず彼の顔に見とれた。目が閉じられていて瞳の色はよく分からないが、眉は形よくつり上がり口元はきゅっと引き締まっ
ていて、女性でもここまでの人はいないのであると思うほど綺麗な肌をしていた。城下からそう離れてはいないとは言っても、こんな山中の田舎に住んでいる秋月は、男女問わず、ここまでの美人を見たことがなかった。男性に美人というのも変かもしれないが、他にピツタリとくる形容が見つからない。

そのとき、男性の指がピク、と動いた。と思うと、ゆっくりと目が開かれる。切れ長で深い紫色の瞳が、真っ直ぐに秋月の視線と交わった。

「：あ、気がつきました？」

目がしっかりと合ってしまったことが少し恥ずかしくて、秋月は照れ隠しの様に口を開いた。彼の目を見ると、ああやっぱり美人な

のだと改めて思った。

「…ここは…。」

男が初めて声を出す。少ししわがれていたが、男性特有の低い、けれども耳当たりの良い声だと秋月は思った。

「城下近くの山中です。ここに倒れていらっしゃったんですよ。ご気分はいかがですか。」

男はゆっくりと体を起こし、辺りを見回した。その反動で彼の額にのっていた手拭いが膝の上に落ちる。彼は初めてそれに気づいた様子で、驚いたように手拭いを見た。

「これは、お前が？」

「はい。私はこの山のふもとに住んでおります、秋月と申します。この暑さにやられたのではないかと思いますのですが…ご迷惑だったでしょうか。」

「いや、助かった。礼を言う。」

彼はそう言ってまた辺りを見回した。どこを見ても、木や草しか目に入らない。聞こえてくるのは蝉の鳴き声だけだ。眉をひそめて辺りを見ている彼を、秋月もまた不思議に思っ て見つめていた。何か珍しい物でもあるのだろうか。

「…俺はどうして、こんな所で倒れていたんだろうな。」

彼は唐突に呟いた。それには秋月もキョトンと目を丸くする。

「お、覚えていらっしゃらないのですか…？」

そう尋ねると彼は目を閉じて考え込み、わしゃわしゃと頭をかいた。

「らしいな。何も思い出せない。」

何か大事な役目があったような気はする。しかしそれが何なのか、思い出せない。

秋月の頭に、記憶喪失という言葉が浮かんだ。話には聞いていたが、実際にそんな人に会うのは初めてだった。これは珍しい体験をしているのではないかと不謹慎なことを思った自分を叱る。記憶がないことで、この人は不安な思いをしているのかも知れないのだから。

ら。

難しい顔をしている彼を見ながら、秋月はそつと口を開いた。

「…では、お名前は？」

「名前…。」

彼は呟いて、少し考える。そしてふいに秋月の方へ顔を向けて言った。

「十和^{とわ}だ。」

「十和様…？」

「ああ、名前だけは何故か覚えている。」

秋月は少しほっとした。名前を覚えているのなら、他のことを思い出すのもそう時間がかからないかも知れない。

ふと空を見上げると、太陽はもう真上から西の方へと動いていた。とはいえ、暑さは和らぐことはない。今日はいつにも増して厳しい暑さだった。このままでは今度は自分が目を回して倒れてしまいそうだ。秋月はそう思い、十和に視線を戻した。

「十和様、立てますか。」

「ん？ ああ。」

「ではとりあえず私の家へ行きましょう。いつまでもここにいても仕方ありませんし。ここから30分ほどかかるのですけれど…。」

そう言って秋月は立ち上がり、籠を持ち上げた。十和はまだ少し頭がぼうつとしているような気がしたがとりあえず立ち上がって、少し先でこちらを振り返って待っている秋月の元へと歩いて行き、隣に並んだ。

歩きながら、十和は何気なく秋月が持っている籠の中を覗いた。

沢山の野草が入っている。

「…秋月、といったか。」

「はい。」

「何だか呼びづらいな。」

秋月は十和の表情を見てクスッと笑った。この人には全く悪気が無いのだろう。

「それならアキとお呼び下さい。親にはよくそう呼ばれていました。」

「じゃあ、アキ。この山へは、野草を摘みに？」

秋月は十和の視線が籠の中へと向けられていることに気づき、見やすいように籠を傾けてみせてから、「ええ」と頷いた。

「よく行くんです。この野草は食用にもなりますし、煎じて薬にすることも出来ますから。」

それから、煎じた薬を少しのお金や畑でとれた野菜などと交換して、近くの村の人々にあげているのだと説明した。この山にはありとあらゆる薬草が生えていて、たいていの症状は治すことが出来る。今日摘んできたのは、傷に塗ると効果のあるものだった。

「昔はこの辺りも平和だったのですが、近頃は付近の村々で妖^{あやかし}が出たという噂をよく聞きます。怪我をなさる方も多くて、この薬草は大活躍なんですよ。」

「妖か…。」

妖とは、太古の昔から存在する異形の者たちのことだ。時々人間の前に現われては悪さをしていく妖は常に人間の悩みの種であった。中でも特に注意が向けられているのは“鬼”と呼ばれる存在である。他の妖とは違い、鬼には知恵があり、人間と非常に近い形をしている。外見で見分けるには鬼の目と耳を見るしかない。鬼の目は人間と比べて瞳孔が縦に細くて色素が薄く、耳は尖っている。この鬼が妖達を組織し、人里を襲うことがしばしばあった。そして困ったことに、普通の人間には鬼を退治することが出来なかった。

鬼を倒すことが出来るのはこの国にたったの四人だけ。人々は彼らのことを“四神^{ししん}”と呼んだ。彼らは国によって管理され、四つの神から力を与えられていた。四つの神とは即ち土・風・火・水の神であり、“四神”達はそれぞれこのうちの一つの神に認められ、力を授かっていた。それだけでなく、四神の者達は神の力を守る者として、土守^{つちのかみ}・風守^{かぜのかみ}・火守^{ひのかみ}・水守^{みずのかみ}という別称も持っていた。長い間四人だった四神の中に鬼守^{おにのかみ}という人物が入ったのは今から百年ほど前

のことだ。彼は四つの神から力を与えられた訳でも無いのに鬼を倒す力を持っていた。他の四神が踏襲制であるのに対し、鬼守の位置にはずっとある一人の人物が就いている。要するに、鬼守となった人物は年をとっていないのである。彼は百年前の当時からずっと二十代半ばの青年の姿のままだという。

記憶を失っていても生活に必要な知恵は残っているらしい。妖閥係のことを、十和はしっかりと覚えていた。ここ数年、妖の数が増えたと聞いている。

「本当なら、こんな薬たくさん作らないですむ方が良いでしょうけれど：情けないことに、他に生活していく術を持っていませんので。」

秋月は笑いながらそう言った。薬で生計を立てるとは、若いのにご苦労なことだと十和は感心した。

それからしばらく歩いていくと、秋月はふいに十和の方へ振り返って明るい声で言った。

「あそこです。」

秋月が指さす方へ目を向けると、そこには小ぢんまりとした家が建っていた。

「どうぞ上がってください。」

玄関の引き戸をガラリと開けて、秋月は言った。中に入ると玄関は案外広く、他の所も外から見るとは遥かに立派だった。綺麗に掃除もしてある。秋月は籠を奥へ置きに行き、戻ってくると十和を居間に通した。秋月以外には誰もいない様子だった。

「アキはここで一人なのか。」

十和は思わずそう尋ねた。今まで勝手に、親と暮らしているものだとはかり思っていた。それを聞いて秋月は少し視線を落とした。

「ええ。父も母も、二年前に死にました。妖に襲われて：。以来は、一人で住んでいます。」

そう言ったとき黙りこんでしまう。十和はしまったと思い、少し

慌てた。

「済まない、嫌なことを聞いてしまったか。」

「いいえ、お気になさらないください。今、お茶を入れますね。」
秋月は顔をあげて笑ってみせた。十和が目を覚ました時に見せたのと同じような、優しくて不思議と心が穏やかになる笑顔だった。

秋月は十和に座るように勧め、自分は台所でお茶を入れて戻ってきた。お茶請けの菓子を切らしてしまい、お茶しか出せなくて申し訳ないと言うと、十和は首を振った。

「それこそ気にしないでくれ。俺はいろいろと世話になりっぱなしだからな。」

今度は十和が微笑する。その表情に、秋月はしばし見惚れた。

初めて笑ってくださいました。

そう思うと嬉しいやら照れくさいやらで、顔がだんだん緩んでいくのがわかった。慌ててお盆で隠したのを十和に見られて不思議そうな顔をされたが、秋月は笑ってごまかした。

「…薬草の見分け方も煎じ方も、幼い時分に両親から教わったものなんです。」

照れ隠しの為か他に何か意図があったのか自分でもよくわからないうちに秋月は言った。

「父も私と同じように、この山で採れた薬草を煎じて薬にして、生計を立てていました。もともとは体の弱い母の為に作っていたそうです。決して裕福ではありませんでしたが、両親は幸せだということも言っていました。私も幼いころからよく父の手伝いを、遊びの感覚でしていました。」

秋月は微笑しながらそういってお盆を脇へ置いた。バカ丁寧ではないけれど心地の良い程度のゆっくりな所作とものの言い方は、両親のしつけの良さをうかがわせる。きっと秋月自身幸せだったのだらうと、十和は思った。両親の話をしている間、彼女が笑顔を絶やさなかったのがその証拠だ。その笑顔を見ているとこちらまで幸福になれそうな、そんな笑顔であった。

「十和様？」

しばらくしてから声をかけられ、十和はようやくふと我に返った。

「ああ、何だ？」

「どうかなさいました？ さっきからずっと笑っていらっしやいますけど。」

「笑ってる？ そうか？」

「ええ、ほんの少し。」

秋月はくすくすと笑った。笑われた十和の方は決まりが悪くて、何だかなあと頭を掻いた。秋月といると調子が狂ってしまうようだ。いつもの自分らしくない。

そこで十和はぴたりと動きを止めた。いつもの自分らしくない？いつもの自分？一体どんな自分だと自問する。しかし思い出せない。もしかしたら、今までの自分がどんな人間だったのか、感覚的には覚えているのかもしれない。すると次の瞬間、何とも言えない感覚に襲われた。こういうのを焦燥感というのかもしれない。何だかひどく気持ちが急いて、じっとしてられない感じだった。なにか、急いでやらなければいけないことがあった気がする。

ここを出よう。十和は衝動的にそう思った。

「：俺はそろそろ、お暇するでしょう。」

「え。」

秋月は顔から笑みを消して十和を見た。今は少し不安そうな顔をしている。よく表情が変わる女子だと、十和は半分感心したような気持ちでその顔を見ていた。何となく、彼女とここで別れてしまうのが残念なような気もする。

「けれど、まだいらしたばかりなのに…。」

「あまり長居してもアキに迷惑がかかる。それに、もうすぐ夕暮れだ。」

「なら尚更です。夕暮れになればすぐに暗くなります。ここから近くの村まではどんなに早くても一時間はかかるんです。暗くなる前に宿を探すなんて今からではとても出来ませんよ。十和様、どこか

行く当てがあるのですか。」

十和は言葉に詰まった。この地に住む秋月がそう言うのだから、本当にじきに暗くなるのだろう。記憶もないのだから行く当てなどあるはずもなかった。そのまま答えないでいる十和を、秋月はじっと見つめている。十和はますます口を開きづらくなった。

「行く当てはない。が：ここにいまする訳にもいかないだろう。」

「あら、どうして？ お泊りになればいいんですよ。」

「あのなあ……。」

これには十和も閉口した。この家には秋月一人しか住んでいないのだ。そこに男を泊めるなどと、彼女は本気で考えているのだろうか。

「一人暮らしの女子おなごの元に泊まる訳にはいかない。」

「そんなこと、お氣になさらなくてもいいんですよ。」

「そんなことって、大事なことだろう。」

呆れたように言う十和とは裏腹に、秋月はクスツと笑い始めた。

「大事なことだと十和様がわかっていらっしゃるのなら平気です。

使っていない部屋がいくつかありますから、もしよろしければ、記憶が戻るまで使ってください。」

秋月はそう言いながら、空になった十和の湯飲みにお茶を注いだ。コポコポ：という音をたてて湯飲みが満たされていく。それを眺めながら、十和は何と言えいいのかわからず少し戸惑っていた。この娘は客人に対していつもこうなんだろうかと思うと、急に彼女が心配になってくる。初対面の人間をこんなに信用するなんて、何て危険なのだろう、と。

「そんなにお人好しだと危ないぞ。世の中には悪い人間だっているんだからな。」

「それくらい存じています。こんな田舎に住んでいて、頻繁に人会う訳ではないですけど、人を見る目には自信があるんですよ。十和様は、絶対に大丈夫です。」

「言いきったな。」

「はい。ご希望なら何度でも。」

秋月の妙に自信に満ちた返事を聞いて、十和はふっと笑みをこぼした。こいつには勝てないと、心の中で呟く。秋月もつられて笑っていた。

「わかった。アキには負けた。しばらく世話になるとしよう。」

「はい。何もならないところですけれど、ゆっくりして行って下さい。」

秋月は嬉しそうに言った。それを見て十和は笑みを浮かべる。何故か彼女の側という空間はとても居心地が良い気がした。記憶はないが、不思議と不安は感じていない。先程の焦燥感は胸の奥で今もくすぶっているような感じだったが、その正体がわからないのに動いたって意味はないだろう。自分をこんなにも急かすもの。その原因を知りたいのなら、まずは焦らないことだ。この場所でゆっくり記憶が戻るのを待つ。それが一番の方法のような気がした。そして何より十和は、秋月の笑顔をもう少し見ていたいと思うのであった。

一話（後書き）

読んでいただいております。

初投稿なので拙い部分は多々あると思いますが、どうぞよろしくお願ひします。

とりあえず、ちゃんと完結できるように頑張ります！

二話（前書き）

小説タイトルとサブタイトルを若干変更しました。内容は変わっていません。

二話

それから一月が経った。十和の記憶は一向に戻る気配がなく、二人はそのまま共に生活していた。秋月の元に薬を買いにやってきた近くの村の人々は、十和を見ると皆驚き、秋月が婿を取ったとからかった。十和と生活し始めてから、秋月にとってはそれだけが唯一困っていることだった。

ある晴れた日のことである。秋月はいつものように家で薬を煎じていた。十和は一人で裏山に出かけている。薬草を取りに行っているのだ。記憶を無くして自分の職も分からず、特にすることを持ち合わせていなかった彼は、数日前に秋月に「薬草の見分け方を教えてくれ。」と頼んだ。秋月は快く了承し、二人で連れだって裏山へ出かけることもあった。今日は薬を取りに来る客があったので、十和が一人で行っているのだ。

「精が出るねえ、秋月ちゃん。」

ちょうどそこへ客がやってきて、声をかけた。近くの村に住んでいて、秋月の両親が生きている頃から薬を買いに来てくれる、中年の女性である。秋月は女性のいる縁側の方へ体を向け、にっこりと笑った。

「お久しぶりです、お妙さん。」

「おや、今日はあの男前な兄ちゃんはいないのかい？楽しみにしてたのに。」

妙は家の中をちらりと覗いて、残念そうな声をあげた。お妙は数週間前にここに薬を買いに来た時に、十和と顔を合わせている。秋月はふふ、と笑った。

「ええ、十和様は薬草を取りに裏山へ。」

「へえ、十和様、ねえ。もうすっかり夫婦めおとのようだね。」

「め、夫婦：！？」

そう呟いたきり、秋月は顔を真っ赤にして口を閉じてしまう。薬

を買いに来た客が十和を見ると必ずこんな風にかかったが、秋月にはまだ免疫が出来ていなかった。その反応を面白がられて余計にからかわれているのだとわかってはいるのだが、その度に顔を赤くして俯くことしかできなくなる。そんな秋月の反応に対し、お妙は大声で笑った。

「冗談だよ、冗談。そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃないか。」

「もう、やめてくださいよ、そんな冗談。」

秋月はほっと息を吐いて、安堵の表情を浮かべる。近くにあった薬包紙を手にとると、たった今調合し終えた薬を少量ずつ丁寧に包んだ。お妙はその秋月の行動を見ながら、やんわりと微笑む。

「だけど秋月ちゃん、これは冗談なんかじゃないよ。あの兄ちゃんが来てから、毎日楽しそうじゃないか。」

「え…。」

秋月は手を止めて、お妙の方へ顔を向けた。

「そうでしょうか。」

「そうだよ。気付いてないかもしれないけどね、そうやっていつも笑っている。」

お妙にそう指摘されて、秋月は自分の頬に手をあてた。確かに、口元が少し上がっている。私、笑っている。そう思うと、急に恥ずかしくなって顔が熱くなった。

「やっぱり、そうなんですかね…。」

「何だい、自覚があったのかい。」

お妙はいかにも興味津津といった様子で、身体を前にのりだして来た。秋月は少し考える素振りをした後で、手に持っていた薬包紙を置き、お妙の近くまで行ってきちんと正座した。

「確かに十和様がいらしてから毎日楽しいです。十和様が初めてここにいらっしゃったとき、私、今思うと信じられないくらい大胆なことを言いました。…もしかしたら私は、両親が死んでからずっと寂しかったのかも知れません。誰かに側にいてほしいと思っていた

のかもしれないです。」

「：うん、そうかい。」

お妙は真面目な顔で頷くと、秋月の頭をポンポンと撫でた。

「何にしても、あんたの側に誰かがいてくれるのは安心だよ。近頃はこのあたりも物騒だしね。」

「妖のことですか。」

「ああ、そうさ。」

お妙は重々しく首を縦に振り、真剣な口調で言った。

「昔はこの辺じゃ妖なんて聞いたこともなかったけど。いつ頃だったか：そうそう、二年前、ちょうどあんたの両親が亡くなる少し前くらいだったかな。ここから西の方角にある村に名高い弓の名手がいたんだけど、妖に殺されちゃったんだって。それからだよ、こいらにも妖が出るようになったのは。噂では、それまでその弓の名手が妖から近隣の村を守ってくれてたようだけど、死んじまってからは妖がどんどん勢力を広げてるっていう話さ。」

「そうなんですか。」

「あんたも気をつけるんだよ。両親のこともあったように、いくら田舎の山中だって言っても人ごとじゃないんだから。まあ今は旦那が側にいてくれるから、アタシも少しは安心だけど。」

その言葉に、秋月はキョトンとして首をかしげていた。しばらくしてお妙の言う「旦那」の意味を理解すると、急に顔を真っ赤にした。

「もう、お妙さんったら、またそんなこと：！」

秋月は怒ったようにそう言って、さっと立ち上がり部屋の奥へと入っていく。お妙は少しからかい過ぎたかと思いつつも、その反応が面白くて顔がゆるんってしまった。するとそこへ、ガサガサと草木を掻きわけて十和が姿を現す。

「お、客人がいる。」

そう言うのと縁側までやってきて、背中の籠を降ろした。中には大量の薬草が入っている。

「十和様、おかえりなさい。」

「お疲れさん。精が出るね。」

秋月とお妙が言う。十和はお妙の顔を見ると、おや、と呟いた。

「あんたは、この前の。」

どうやらお妙のことを覚えていたらしい。お妙はどうもと十和に挨拶をする。秋月はそこに先程の薬包紙をいくつかまとめて紙袋にいれたものを持ってきた。

「お妙さん、これ、頼まれていた傷薬です。すこし多めに包んでおきましたから。」

「ああ、助かるよ。ありがとう。」

お妙はその袋を受け取り、代金を渡した。十和はその袋をじっと見つめ、何か考え込んでいる。少し間をおいてから、お妙に尋ねた。「その薬、やはり妖のせいで必要になっているのか。」

するとお妙は戸惑った様子でちらりと秋月を見た。秋月も何故十和が急にそんなことを聞いたのかわからないようで、首をかしげている。

「まあそうだね。近頃じゃ必需品だよ。」

「妖を遠ざけるには、何か煙の出る物：線香でも何でもいいが、置いておくといい。少しは違うはずだ。妖は煙のにおいを嫌うから。」

十和は真面目な表情でそう言った。お妙は余計に戸惑ってしまい、秋月に近づいて小声でささやく。

「秋月ちゃん、あの人、なんであんなに妖に詳しいんだい。記憶、無くしてるんじゃないの。」

しかし秋月にも何が何だかわからないようで、ただ首を横に振ることしか出来なかった。何より、秋月の方がお妙よりもずっと戸惑っているようだった。

「どうかしたのか。」

急にひそひそ話を始める二人を不審に思ったのか、十和はわずかに眉間にしわを寄せて声をかける。二人はとたんに振りかえって、何でもないと言った。

「それじゃ、さっそく家に帰って試してみるよ。じゃあ、私は帰るから。」

お妙は簡単に十和に礼を言くと、そそくさと立ち上がって山を降りて行った。残された二人は黙ったまま、縁側に腰かけている。その時、十和が小さくため息をついた。秋月からは後姿しか見えなかったが、それが何となく、彼女を不安にさせた。何故か急に十和が遠くなってしまった気がした。秋月は居てもたってもいられなくなって、立ち上がって十和の隣まで移動し、静かに腰を下ろした。

「十和様…。」

自分で思ったよりも弱々しい声だった。十和もその声に不安が含まれていることに気付いたようで、秋月の方に顔を向けると少し笑ってみせた。

「何だ、どうした。」

「あの、何か…何か、思い出したのではないですか。」

「どうしてそう思う。」

「だって…。」

そう言って秋月は俯いた。考えてみれば、十和は記憶をなくしたとは言え生活に必要なことは覚えていた。秋月やお妙が知らなかっただけで、妖が煙を嫌うということももしかしたら一般的な知識で、十和もともと覚えていたのかも知れない。そうは思っても、秋月の不安は拭えなかった。もし十和が全ての記憶を取り戻してしまったら、彼はきつと、ここを出て行ってしまう。

一方十和は俯いた秋月を見てどうしたらいいのかわからず、頭を掻いた。彼女が今何を思っているのか、全くわからないなんていう程鈍くはない。先程の弱々しい口調からしても、何となくの察しはついていた。ただこういう時に何と声をかければいいのかわからない。

「…山の中を歩いていると、どうでもいいことは少ずつ思い出す。昔はよく動物に懷かれたとか、さっきのような、妖の嫌いなものとか。俺はどうやら、妖については人より少しばかり詳しいらしい。」

十和の言葉を聞いても、秋月は顔を上げることが出来なかった。きっと、自分は今笑えない。情けない顔なんて十和には見せたくなかった。秋月は何も言わずに立ち上がると、逃げるように部屋を横切り、廊下へ出て台所の方へと向かった。

秋月がいなくなると、十和は大きくため息をついた。たえどうでもいいことであつたとしても、昔のことを思い出したのは今日が初めてであつた。何だか落ち着かない心地である。妖についての知識が多いということも気にかかるが、それよりもあの焦燥感が、昔を思い出すことによつてどんどん増してきているような気がした。早く、早くともう一人の自分が急かす。それが一体何なのかはわからない。こんなに強い焦燥感をこの家に最初に來たときに感じていたら、きっと自分は何と言われようともここを出て行つただろう。しかし、と十和は考え込む。今はもう、どんな事情があつたとしても、秋月を一人にしたままここを出て行くことはためらわれた。

そこへ、お盆の上に湯呑みを二つ乗せて秋月が戻つてきた。お茶を淹れに行つていたらしい。すすすつと十和の脇に來て腰をおろし、十和に湯呑みを差し出した。それから自分の湯呑みをお盆から降ろして、お盆は脇へよけた。

「：明日は、近くの町までいろいろとお買い物に行こうと思つています。十和様はどうなさいますか。」

ふいに口を開いてそう言つた彼女はまだ十和の顔を見ようとしな。十和は受け取つたお茶を一口飲んでから答えた。

「いや、俺はいい。もう少し山の中を歩いてみるよ。何かまた思い出すかもしれないな。」

「：そうですか。くれぐれもお氣をつけて。近頃はこの辺りにも妖がいるといえますから。」

そう言う秋月の声には元氣がない。十和はどうしたものだろうと少し考えてから、ふいに手を伸ばして秋月の頭を優しく撫でた。突然のことに驚いて、秋月はようやく顔を上げる。微笑している十和の顔が目に入つた。

「心配するな。たとえ記憶が戻っても、俺はお前を一人ぼっちにしないから。」

十和が言うと、秋月は困ったように眉を寄せて、無理に笑った。

「…もう。」

そうは言うものの、内心ではそんな風に言ってもらえたことが嬉しかった。あまりに嬉しくて、気を抜くと泣いてしまいそうになる。だから何とかして笑っていた。そんな秋月の心を見抜いているのか、十和の手は何度も何度も秋月の頭を撫でている。大きくて優しい手。こんなに安心する手を今までに感じたことはなかった。

「それにしても、ずいぶん沢山摘んできて下さったんですね。」

秋月は無理やり話題を変えようと、十和が摘んできた薬草を見る。ギザギザと尖った葉が特徴のこの草は打ち身によく効くもので、秋月が十和に頼んでいたものだった。

「ああ。この山には本当にいろいろな薬草が生えているんだな。」

十和は少し得意げに言う。そんな彼に微笑み返ししながら、秋月は考えていた。十和に薬草の種類を教え始めてから数日。薬草のことを一から覚えたにしては、十和の記憶力は尋常ではなかった。秋月が一度教えたものは全て覚えてしまったし、それどころか教えていない薬草まで知っていた。きっと記憶がなくなる以前に、薬草の知識があったのだろう。

このままいけば十和が全ての記憶を取り戻すまでに、そう長い時間はいらない。そう思うと、何とも言えない寂しさがこみあげてくるのであった。

三話

お妙がやってきた次の日、秋月は少し早目の昼食を済ませると、さつそく町へ下りて行つた。秋月の家からは1時間ほどかかる道のりを、彼女は慣れた様子でずんずん進んでいく。30分後には予定通り、沢山の人で賑わう町の大通りを歩いてた。道に面した建物のほとんどが何かしらのお店で、威勢の良い呼び込みの声が辺りに響いている。中には秋月と顔見知りの姿もあって、ときどき「よう秋月ちゃん」と声をかけられた。秋月はそれに笑顔で対応しながら、足を止めることなくどんどん歩いて行つた。

彼女の目的の店はこの通りの一番外れの方にある。そこは葉包紙やすり鉢など、薬草を煎じるのに必要な品を扱っていた。場所の不利と取り扱っている商品が商品なだけに、いつ行ってもその店に客がいることはなかった。

店に着くと、やはり今日も客の姿はない。それでも秋月は慣れたもので、店の奥の椅子に腰かけて本を読んでいる老人に声をかけた。「こんにちは、昭吉さん^{しやうきち}。今日はいい天気ですね。」

すると老人は顔をあげて、ずり落ちた老眼鏡をはずした。秋月の顔を見るとにっこりと笑う。彼の名は昭吉。外見は六十代前半の、白髪頭の頑固そうな老人だが、彼はこの春七十八歳になった、町で一番の博識者である。

「秋月か。そろそろ来る頃だと思つとつたわ。」

「相変わらずお元気そうでなによります。」

「わしは元気だがな、店の方はさっぱりだ。…まあジジイの娯楽でやつとる店だからな。お客はお前くらいなものだ。ゆっくり見て行け。」

秋月は昭吉の相変わらずの口ぶりに笑った。今でこそ流行っていない小さな店の店主をしている彼だが、若いころは仕事の出来る好青年で、ずいぶん稼いでいたらしい。彼が四十代の頃に建てた大通

りの大きな問屋は繁盛し、彼が隠居してからは彼の息子夫婦が後を継いでいる。秋月の家で煎じた薬を買い付けてくれることもあって、昭吉と秋月の父親は良い商売仲間であった。そんな訳で特に金に困っている訳ではない昭吉は、この店が流行らないことをさほど気にしていない。ただ店を開いていればときどき昔馴染みの顔が見られるし、こうして秋月も来るので続けているのだ。彼女の両親が死んでからは、昭吉と、それにお妙が保護者代わりのようなもので、いろいろと世話を焼いていた。

秋月は薬瓶の並ぶ棚を眺めていた。どれも中身は入っておらず、透明だったり茶褐色だったり、丸かったり四角かったりと様々である。

「そう言えば、聞いておるか。」

秋月が半透明の瓶を手にとって眺めていると、昭吉はふと口を開いた。秋月は振り返って、本を片手にこちらを見ている昭吉と目を合わせた。

「何をです？」

「鬼退治を生業としとる連中のことさ。」

ふざけたような口調で昭吉は言う。秋月はああ、と合点した。

「“四神”の方々のことですね。」

「そうだ。その四神とやらが、今なかなか大変なことになったらしい。」

昭吉はそう言うと言っていた本を閉じて本棚へ戻しに立ち上がった。秋月は「大変なこと？」と首をかしげて、その昭吉の動きを目で追う。彼は再び戻ってきて椅子に座ると、続きを話した。

「何でも五人のうち二人がいなくなったって話だ。」

「いなくなったって、何故です？」

「これは噂だからな、定かじゃねえが：いなくなったのは、火守と鬼守だ。秋月、お前、二年ほど前に殺された弓の名手は知っているか。」

いきなりそう尋ねられて秋月は戸惑う。少し考えてから、昨日の

お妙の話だと思いあたった。

「ええ、昨日お妙さんから聞きました。近隣の村を妖から守って下さっていたと。」

「それがな、実はその弓の名手が火守だったんだ。二年前、火守は妖に殺された。」

「ええ!？」

秋月は驚いて思わず大声をあげた。二年前に死んだ弓の名手がまさか火守だったとは、全く思いもしなかった。だいたいあの四神のうちの一人が死んでいたのなら、もっと大きな噂になっていてもよさそうなものである。三年前に先代の風守が引退し、新しく十四歳の少年が風守になった時も、その知らせはあつという間に国中に知れ渡った。その時は史上最年少の四神だということで余計に騒がれていたということもあるが、それにしても火守の死がここまで知られていないのもおかしい。

「でも、火守様が亡くなったなんて話、聞いたことがありませんよ。それに、四神の方々は城内で生活なさるのだと聞きましたけど。」

「結婚して所帯を持てば城を出ることが許されとるんだ。家の場所を国に知らせておくことが条件だがな。死んだことを公表したらんのは混乱を避ける為であろう。ただでさえ今は妖の数が増えておるのだ、四神が戦力不足と聞けば民は騒ぎ始める。」

そうか、と納得して秋月はため息をついた。自分とはあまりに遠く離れた世界のここのようであまり現実味を帯びてこないが、相当大変なのだろうなということだけはわかる。何せ、国が二年間も民に知らせずにいたくらいなのだ。

「火守様の後継者は…。」

「まだ見つかつたらん。そこで、鬼守の話だ。」

秋月は首をかしげた。昭吉は眉をひそめて難しそうな顔をする彼女を手招いて、自分の正面に座らせる。秋月は素直に椅子に座った。「火守が死んだ後、鬼守は火守の後継者を探せと上から命を受けた。鬼守はすぐに出発してあちこち歩き回り、火守にふさわしい者を探

したが：なかなか見つからん。そしてとうとう鬼守からの連絡が途絶えた。まあ、行方不明になったっちゅうことだな。」

「行方不明：！」

昭吉はゆっくりと頷く。そして続けた。

「お前も知つとるだろうが、鬼守は噂通りここ百年以上もの間交代はしとらん。姿も若い男のままだ。名は十和といってな、なかなかに整った顔立ちをしとるらしい。」

「とっ：！」

十和様！？と言いかけて、やっこの思いで秋月は口をつぐんだ。今聞いたことが信じられない。鬼守の名前が十和で、整った顔立ちだなんて。

（今うちにいる十和様と全く一緒だわ。）

それでもやはり信じられない気持の方が勝っていた。確かにそうある名前ではない。けれどまさか、十和が鬼守だったなんて一体誰が思うだろう。外から見たら普通の人と変わらない彼が、百年も年をとっていないだなんて。秋月は頭の中が混乱してくるのを感じた。

「まあ今まで妖や鬼に負けたことはないから、お上の方もそっちの心配はしていないようだが。しかし残っている四神たちは、力があると言ってもまだ若いからな。少し心許ないのだろう。：おい、秋月、どうした。聞いておるのか。」

「あ、はい。」

俯いて眉を寄せている秋月を不審に思っ昭吉が声をかけると、秋月はハッと顔をあげた。笑顔を張り付けているその表情は、少し慌てているようにも見える。昭吉は眉をひそめて、秋月の様子を見ていた。

「そういえばお妙さんから聞いたぞ。記憶喪失の男を家に泊めとるそうじゃないか。」

すると秋月はびくつと肩を震わせた。それを昭吉は見逃さない。これは何かある、と長年生きていて培ってきた直感が彼にそう告げ

ていた。

「全く、一人暮らしの娘が家に男を泊めるなど、感心せんぞ。何かされたりしとらんだろうな。」

「昭吉さんったら。十和様はそんなことするような方じゃ…。」

そこまで言って、秋月はハッと右手で口を押さえた。しまった、と思ってももう遅い。昭吉の耳にははっきりと、「十和」という男の名が聞こえていた。昭吉の眉間のしわが深くなる。

「ほう、十和というのか、その男。鬼守と同じ名だな。」

「わ、私…。」

秋月は慌てて立ち上がった。がたと椅子が音を立てる。

「私、もう帰りますね。あまり遅くなってもいけませんし。では、失礼します！」

そう早口で告げて、秋月は逃げるように急ぎ足で店を去った。昭吉は慌てて出ていく彼女の姿を店先まで出て見送る。彼女の背中が人の多い大通りの中に消えていくのを確認すると、はあ、と大きなため息をついた。全く、あの娘はわかりやすい。昭吉はふと空を見上げると、誰に、という訳でもなく呟いた。

「…全く、何をしとるんだ十和。」

家に帰ってみると、十和はまだ帰ってきていなかった。玄関の戸を開けると家の静けさが際立つ。ついひと月前まではこれが当たり前だったのに、十和が来てからは一人でいる時間が短くなったせい、今はこの静寂がたまらなく恐ろしいような気がする。秋月は不安で高鳴る胸を押さえながら家の中に入った。とりあえず、自室で座って、ゆっくりと考えてみようと思った。

あんな風に急に店を出てきて、昭吉はきつと不審に思っただろう。それでもどうしたらいいのかわからなかった。今、自分の家にいる十和は、おそらく行方不明になった鬼守だ。そのことを昭吉に、いや、昭吉だけでなく誰にも知られたくなかった。誰か一人でもそれを知れば、それはたちまち町中の噂になる。この辺りは城にも近いため、間もなくお上にも知られることになるだろう。そうしたら、十和は城に戻されてしまう。もう十和とは一緒にいられなくなってしまふ…。

（そんなの、嫌…。）

あのととき、十和を自分の家に泊めていなければきつとこんなことを思わずに過ごしていたに違いない。自分は今まで一人でやってきたのだから、これからも一人で大丈夫だと。そう自分に言い聞かせるように何度も繰り返して。けれど、実際は違う。本当はずっと寂しかった。誰かに側にいてほしかった。一緒にいると心が安らぐ、この心の穴を満たしてくれる、誰よりも大切だと思えるような人。そんな人を、ずっと探していた。

私は、十和様が好き。

いつのまにか胸の中に芽生えた想いは、改めて意識してみるとこそばゆくて、でも胸の奥がほんわかと温かくなるような不思議なものだった。両親が死んでからは山の中に一人暮らしていた秋月にとって、それは初めてとも言える感情だった。

「アキ？」

急に声をかけられて、秋月はびっくりして振り向く。そこには秋月の部屋の入口に立って、こちらを見ている十和がいた。

「十和様…。」

「もう帰っていたのか、早かったんだな。それとも俺が遅かったのか…。」

済まないな、と少し笑いながら彼は言う。秋月はそんな十和をじっと見つめた。

『十和様、私、あなたのこと知ってしまったんです。あなたは、鬼

守だったんです。』

そんな言葉が頭に浮かぶ。けれど、とても声にすることが出来なかった。わかつている、これが我が儘なのだということは。十和にとっては、早く全てを思い出した方がいいということは。けれど、それでもやはり言えなかった。

「：アキ！？どうしたんだ。」

十和は慌てた様子で秋月に近づき、肩を掴む。秋月はその時ようやく自分が泣いていたことに気がついた。

「アキ：。」

十和はそっと秋月の涙を指で拭う。秋月は泣き顔を見られたくなくて俯いた。十和はどうしたらいいのかわからず、おろおろするばかりである。しばらく考えた後に、そっと秋月の肩を抱き寄せて、頭を撫でてやった。

「何があったのかはわからないが：好きだけ泣け。こうしていれば顔も見えないから。」

その言葉があまりにも温かくて、その手があまりにも優しくくて、秋月の目からは次から次へと涙があふれて止まらなかった。十和の着物を掴み、嗚咽が漏れそうになるのをこらえる。

ようやくと見つけた、誰よりも何よりも大切だと思える人。ずっと側にいたいけれど、それは無理な話だおちゃんとわかつている。今はただ、この時間が少しでも長く続けばいいと思った。

四話

秋月が泣きやむのをすぐ側で待っている間、十和は少し混乱する頭の中で昼間のことを思い出していた。

午後。秋月が町へ出かけるのと同時に、十和は山の中へと出かけた。町へ行くということは、彼女は夕方まで帰らないだろう。そう思って、少し遠くまで歩いてみることにした。緩やかな斜面を上へのぼり、そうして、ひと月前に自分が倒れていた場所までやってきた。

「ここで俺は倒れていたのか。」

そう呟いて辺りを見回す。たいした高さではないが上が崖になっていて、それ以外は周りを木々が囲んでいるだけ。十和は崖の真下に立って上を見上げた。この崖と、自分が倒れていた場所は少し離れている。上から落ちてきたという可能性は低そうだ。第一、落ちてきたのなら擦り傷のひとつやふたつあってもおかしくないが、十和は全くの無傷だったのである。ならば何故倒れていたのだろうか、十和はもう一度辺りを見た。すると、近くの茂みに何か光るものが落ちているのを見つけた。近づいて行って拾い上げると、それは懐に入るくらいの長さの小刀だった。特に凝った細工が施されている訳ではないが、柄尻に赤い総がついている。十和はその小刀に見覚えがある気がした。

「これは…。」

呟いた瞬間、こめかみに鋭い痛みが走る。十和は小刀を持つのは逆の手で頭を押さえた。あまりの痛みにも声が出ない。足元がふらふらするのでとりあえず膝をついた。ドクン、ドクンと心臓の音が体中に響く。何なんだ、一体…。心の中で悪態をつく。すると頭の中で声がした。

『十和。』

聞き覚えのある声だ。そう思ったとたん、ある場面がありありと思い浮かんだ。

一人の男が十和と向かい合っている。その男は真剣な表情をして、手を差し出した。握られていたのは、ひと振りの小刀。今まさに十和が手にしているものだった。

『おい、何だよ急に真面目な顔して。何だこの小刀。』

記憶の中の十和は相手を茶化するような口調でそう言って、しげしげと小刀を眺める。男はにこりともせずと言った。

『新調したばかりのものだ。今年十四になったばかりの娘の為にな。お前にこれを預かってもらいたい。』

『何言ってるんだ。娘の為に作らせたんだろう、直接娘に渡せ。』

『それじゃ意味ないんだよ。これを、俺にもしものがあつた時に娘に渡してもらいたい。』

十和は絶句していた。今聞いた言葉が信じられなかった。

『どうしたんだ、縁起でもない。そんな物だったらお前の奥さんにも…。』

『十和。』

十和の言葉を遮って、男は強い口調で十和の名前を口にした。

『お前にしか頼めない。四神の中で十四年前のことを知っているのは、今はお前しかいないんだ。頼む十和。俺にもしものがあつたら、誰よりも早く娘を助けてやってくれ。娘には昔から何度も言い聞かせてあるから。』

そう言って、男は強引に十和に小刀を握らせた。十和はいつもと違う彼の様子に戸惑う。

『お前…娘に全て教えてあるのか。昔から？』

『可哀そうだと思うか？』

考える素振りを見せてから、十和は『いや』と首を横に振る。すると男はようやく笑顔を見せた。いつもの快活な笑顔とは全く違う、柔らかな笑い方だった。

『…まあ、ずっと先のことだろうけどな。よろしく頼んだぞ。』

そう言って十和の肩を叩く。十和は困った奴だと思いつつも小刀を懐にしまった。そのときの肩を叩いた彼の手の感触を、今でもはつきりと思い出せる。彼と会ったのはそれが最後だった。

その三ヶ月後、彼は死んだ。妖に殺されたのだと聞いた。

全て思いだした。十和は深く息を吸う。ようやくわかった、ずっと胸の奥でくすぶっている焦燥感の理由が。俺は急いでこれを届けなければならぬのだ、あいつの娘に。

「弓親^{ゆみちか}……」

十和は友の名前を口にして、小刀を握りしめた。自分の人生の中で最も気が合う人間だった。そして弓親は火守として、自分は鬼守として、互いに最高の仕事仲間だった。

「済まない、少し寄り道をしたようだ。約束は必ず守るから安心しろ。」

十和は小刀に向かって話しかける。そしてそれを丁寧な懐にしまふと、足早に今来た道を引き返した。どうしてだかはわからない。けれど無性に秋月の顔が見たくなり、同時に、今すぐに彼女に会わなければならないと思った。

そうして帰って来てみれば、秋月は十和の顔を見るなり急に泣き出した。何が何だかさっぱりわからない。出来ることと言えば、こうして繰り返しの彼女の頭を撫でてやることだけだった。彼女は十和の着物をぎゅっと掴んで、十和の胸に顔を押し付けて肩を震わせている。その姿を見ると、心臓がぐっと掴まれたように痛む。これが“愛しい”というものののだろうか。今まで誰に対しても感じたことのない感情だった。十和は考えた。本当は今すぐにでもここを出て弓親の娘の元へ行かなくてはならない。城にも無事だと知らせをやらなくては。しかし、彼女を一人にしておくなど出来ない。

どうしたものか、と考えていると、ようやく涙が止まったらしく、秋月が顔をあげた。十和と目が合うと、今度は顔を赤くして恥ずか

しそうに俯く。

「ご、ごめんなさい。突然泣いてしまって…。」

そんな彼女にさえ愛しさがこみ上げる。十和は頭を撫でる手を止めずに微笑んで見せた。

「もう大丈夫か。」

「はい、大丈夫です。」

そう言って笑う彼女はもういつも通りの彼女だった。泣いた理由は聞かない方がよいのだろうかと思った。女心と秋の空、ということわざが十和の頭をかすめる。

秋月を泣かせたくない。しかし自分が記憶を取り戻したことは、告げておくべきだろう。世話になった義理もある。そして何より、何も言わずにいなくなる方が、彼女は悲しむに違いない。

「アキ、話があるんだ。」

十和がそう言うのと、秋月はじっと彼の顔を見つめた。その目で「何ですか」と尋ねてくる。十和は意図的に笑顔を作って言った。

「今日、記憶が戻った。」

秋月が息を飲む。その目が不安に曇っていくのがわかった。それでも十和は続けた。今言わなければこの先ずっと言う機会はない。

「全て思いだしたんだ。アキ、俺は…。」

「知っています。」

秋月は十和の言葉を遮った。十和は眉をひそめる。彼女は今、何と言った？言葉の意味をとらえられていない様子の十和を見て、秋月は俯き、決して目を合わせようとしなかった。

「ごめんなさい、十和様。私、全部知っているんです。十和様が一体誰なのか。」

今度は十和が息を飲む番だった。全く寝耳に水のことと、驚いたとしか言いようがない。どうして彼女が自分の正体を知っているだろう、自分もついさっき思いだしたばかりなのに。そう思っ言葉失っていると、秋月はまたちらりと十和の方を見て、言いづらそうに口を開いた。

「十和様は、鬼守様なのでしょう。」

「どうしてそれを…。」

「今日、町である人に聞いたんです。今、四神の方々が大変らしいと。その中に鬼守様の話題もありました。十和様の名前も一緒に。」
秋月は下を向いた。もう黙ってはいられない。知らないふりをすることは出来ない。

「火守様のことも聞きました。十和様は、火守様の後継者を探さなければならぬでしょう。」

それを聞いて、十和は眉間にしわを寄せた。鬼守の名前を知る人物は確かにいてもおかしくはない。特に隠さなければならないことでもない。しかし、秋月にその話をした人間は四神について詳しくない。何故火守が死んだことまで知っているのだろうか。そのことは城内でもトップシークレットのはずだ。ただの町人が知っているはずはない。

その町人、一体何者だ。

十和は一層険しい顔をした。その表情に、秋月はびくっと肩を震わせる。

「ああ…悪い。」

彼女が怯えているのに気がついて、十和は表情を緩めた。秋月は無言で首を横に振る。

しばらく考えて、十和はある決断をした。全て彼女に話す。火守のこと、国の命のこと、そして弓親との約束のこと。どのみち火守のことを隠したまま自分の身の上話をする自信はなかったし、彼女はもう火守の死を知ってしまったているのだ。今更隠しても仕方がない。十和はひとつ、大きく息を吐くと話し始めた。

「そうだな、隠しても仕方がない。俺は鬼守だ。そして、その町人がどうして知っていたのかは知らんが、火守も死んでいる。俺は後継者を探さなければならない。…全部事実だ、それは認めよう。だ
がなアキ、俺の役目はそれだけじゃない。」

「それだけじゃない…?」

秋月は小さな声で言って、首をかしげた。十和は頷いて見せ、真剣な表情をした。そんな十和の様子に、秋月の背中も自然と伸びる。「何なのですか、その役目って。」

「この役目は誰も知らない。上の連中にも言っていないことだ。だが、アキには話しておこうと思う。そうだな…これを説明するにはまず火守の話をしなくてはならない。」

十和はそう言って腕を組んだ。一つ一つ、弓親についての記憶を掘り起こす。

「火守は弓親という名の、弓の名手だった。若いころ…そうだな、確か二十歳くらいの頃だ。あいつは火守になって城にやってきた。とにかく明るい性格で、さっぱりした奴だった。仕事も出来て人柄も良い弓親は、そりゃあ人気者だったよ。俺もあいつを気に入っていた。俺たちは気がつくと一緒にいることが多かった。今思えばあれが親友と言うやつなんだろうな。」

そう言って十和はふっと笑う。その穏やかな表情に、秋月もつられて頬が緩んだ。

「そのうちに弓親も所帯を持つことになって城から出て行った。でも俺たちはよく顔を合わせていたな。あいつの家族にも何度か会った。そして二年前のことだ。俺は弓親に頼み事をされた。」

秋月はすぐに気がついた。二年前、それはつまり、火守が死んだ年のことだ。それが気になりつつも黙って次の言葉を待っていると、十和はごそごと自分の懐を探り、ひと振りの小刀を取り出した。

「あいつらしくもない、妙に真剣な表情で俺の部屋に來たんだ。一体何の話かと思えば、あいつはいきなりこの刀を俺に差し出して言っただ。『俺にもしものことがあった時には、娘にこれを渡してほしい。』ってな。」

「もしものことって…それでは火守様は、事前にご自分の死を悟っていたんですか。」

「さあ、そうかもしれないな。ただあの時の弓親にとって大切だったのは、自分の命よりも娘の命だった。」

「娘さんの…。」

秋月にはよくわからなかった。親が我が子を守ろうとするのは普通のことだ。しかし素直に納得出来ないのは、まるで十和の言い方が、命の危険にさらされた娘を、弓親が守ろうとしたかのように聞こえるからだ。

秋月の不思議そうな表情を見て、十和は言葉を付け足した。

「弓親には娘ばかり三人いた。しかしそのうちの一人、次女にあたる娘は弓親の本当の娘ではなかった。赤ん坊の頃に弓親が引き取った娘だったんだ。弓親が俺に言っていた娘というのはこの次女のことだが、この娘はある事情で大御所から命を狙われている。」

「え：！？」

秋月は耳を疑った。

「お、大御所様に命を狙われるなんて…その娘さんは何をなさったんですか。」

「何もしていない。ただそうだな、強いて言えば生きている。」

「そんな、生きているのは当たり前のことでしょう。何もしていないのに命を狙われるだなんて…。」

秋月は困惑して首をかしげる。十和は腕を組んで険しい顔をした。「理由が全くない訳じゃない。ただそれがあまりに理不尽なんで、弓親はなんとしても娘を守ろうとしたし、俺も協力しようと言った。弓親の娘の身の安全を確保してやること、それが俺のもう一つの役目だ。」

そう言うと、十和は手にしていた小刀をぎゅっと握りしめてから懷にしまった。秋月は黙ってそれを見つめる。何も言うことが出来なかった。

心の中に広がるこの感情は何なのだろう、と、秋月は何とも言えない気持ちになった。十和が鬼守だと知った時から、わかっていたはずなのだ。彼をここに引き止めるなんて出来ない。彼が記憶を取り戻したら、もうさよならを言わなければならぬ。それなのにどうしてだろう、今こんなに胸が苦しいのは。震える手のひらを、秋

月はしっかりと握りしめた。今にも泣き出してしまいそうなことを、十和に悟られてはいけないと思ったのだ。

「話はわかりました。それなら、十和様、急いで火守様の娘さんの元に行って差し上げなくては。」

「ああ、そうだな。：だが、アキ、俺は。」

十和はそこで口を閉じ、その先を言うことをためらった。秋月は何となく、十和の考えていることがわかるような気がしていた。きっと彼も自分と同じように思ってくれているのだろう。このまま離れてしまうのは寂しい、と。そう思っていてほしいという願望からくる、勝手な思い込みなのかも知れない。しかしそれでもいいと思った。言葉はなくとも彼の目がそう言っていると感じることが出来たから。それだけで十分だと思った。

十和が再び口を開こうとしたが、秋月はそれを止めた。困惑したような顔をする十和の目をしっかりと見つめ、首を横に振る。

「言わないでください。言わなくても、いいんです。」

自然と口が動いて、気付けばそう言っていた。十和が言おうとした言葉、それを聞いてしまったら、もう離れることは出来ない。そんな確信が秋月にはあった。それではいけない。今は離れなくてはならない時なのだ。十和の為にも、そして自分自身の為にも。

秋月は微笑んで見せた。唇が震えそうだったが、なんとか我慢した。握りしめていた手をそっと十和の手に重ねる。冷えてしまった秋月の手には、十和の手がとても温かい。

「行って下さい、十和様。私は平気です。困っている人がいるとわかっていてのに、知らないふりをして私の側にいてもらっても、ちっとも嬉しくありません。私なんかよりもずっと、あなたの力を必要としている方がいるんですから：だから十和様はここにいてほしいんです。火守様の娘さんを、どうか守って差し上げてくだささい。」

十和はしばらく、何も言わなかった。何も言えなかったのかもしれない。もしかしたら泣きそうになっていることがばれてしまっ

いるのかしら、と秋月はぼんやりと思った。視界が歪んでいるのは、きっと涙がたまっている証拠だ。目の前にいる十和がそれに気付かない訳はない。それでも何も言わないのは、彼なりの優しさなのだろう。

「アキ：ありがとう。」

十和は僅かに微笑んでそう言った。言われた瞬間、秋月の目から涙が一筋こぼれる。笑っているはずなのに、もう唇が震えるのを我慢出来なかった。笑顔が崩れる前に、秋月は慌てて下を向いた。ありがとうという言葉がこんなに悲しく響いたのは初めてだった。私は馬鹿だと、心の中で呟く。十和が何の気兼ねもせずにここを出て行けるように、そう思っていたのは上辺だけで、いざ彼が本当に出て行ってしまうとなるとこうして泣くことしか出来ない。せめて十和の前では笑顔でいようと思っていたのに。

その時、ふわりと温かい何かに包まれる。十和が秋月の肩を引き寄せたのだ。十和の温かさに触れて、こらえていたものが一気に溢れだした。

ぎゅっと十和の着物を握りしめる。口からは嗚咽がもれていたが、もう我慢しなかった。今更我慢したところで泣いていることはもうばれてしまっている。十和は秋月の背中をゆっくりと撫でていた。まるで小さい子供をなだめるときのように。

「泣くな、アキ。必ずまた戻ってくる。弓親の娘のことが済んだらまた帰ってくるから：そしたら、一緒に暮らそう。」

秋月は驚いて顔をあげた。目の前にあった十和の顔はとても優しい表情をしていて、それだけで心臓が大きくはねた。秋月の目からはまだ涙が流れていたが、その表情は穏やかなものに変わった。

「はい、待っています。いつまでも。」

十和が本当に帰って来てくれる保証はない。もしかしたら今の言葉は秋月をなだめるための気休めの言葉かもしれない。けれど、たとえそうだったとしても、自分はきっといつまでも待ち続けるのだ。秋月はそう思って笑みを深くした。

四話（後書き）

＊大御所（おおごしよ）：将軍の隠居所のこと、転じて隠居した将軍の尊称。この話では後者の意味で、前将軍を指します。

五話

次の日。二人は町の大通りを歩いていった。二人の間に流れる空気は昨日までと何ら変わりのないもので、和やかに会話をしながら進む。秋月が若い男と連れだって歩くのはこれが初めてのことだったので、顔見知りの者たちは好奇心から二人の様子をうかがっていたが、誰も声をかけることが出来ない。

二人は昭吉の店へ向かっていた。昨晚十和が「火守の話をした奴の店を教えてほしい」と秋月に言ったのである。それならば明日、十和が家を出て行く時に町まで見送るついでに案内すると秋月は申し出た。二人は昭吉の店で別れることになっている。一緒にいられる時間はあとわずかしが残されていない。秋月は一秒一秒を惜しむ心持ちだった。

そのまましばらくまっすぐに歩き、とうとう昭吉の店に到着する。十和は店の前で立ち止まって、その建物を眺めていた。小さな店だ。客も一人もいない。しかし十和はこの店を以前から知っていた。昨晚、秋月から「昭吉」という名前をきいて、まさかと思っていたことがこうして今現実になりつつある。

「御免下さい。」

秋月がそう声をかけて店へ入っていく。十和も重い足を動かして後に続いた。

「はいよ。どちらさんだい。」

奥からそう声が聞こえてくる。間もなく昭吉が姿を現した。彼は秋月の姿を一目見ると驚き、目を見開いていた。

「誰かと思えば秋月か。どうした、お前さん、昨日来たばかりだろう。」

「ええ。あの、実は用があるのは私ではなくて……。」

秋月は歯切れ悪く言って、ちらりと十和の方を見る。十和は一歩前へ出て昭吉を睨んだ。

「やっぱりお前か、狸ジジイ。」

「：ようやく記憶が戻ったか、十和。」

二人はしばらく無言で向き合っていた。その脇で秋月は訳がわからず戸惑っている。昭吉は小さくため息をつくと、奥の椅子に座るよう二人を促した。二人は素直にそれに従い、並んで腰を下ろす。昭吉は二人の向かい側に座った。

「しかし、狸ジジイとは心外だな。わしなんかより、お前の方がよっぽど年上だろうに。」

昭吉が言うと、十和は頬杖をついてフンと鼻をならした。

「アキに弓親の話をした時、アキの家にいるのは俺だとわかっていたんだろう。十分狸じゃねえか。」

「そこはいい。だが百年以上生きとるお前にジジイ呼ばわりされたくないわ。」

「悪いな、年をとらない体質なもんでね。」

悪びれる様子もなく十和は言う。秋月は混乱していた。二人の会話は、まるで昔からの知り合いが話をしているようだった。

「あの、十和様、昭吉さん。：二人はお知り合いなのですか。」

おずおずと声をかけると、二人の視線が一斉に秋月に向く。何となく居心地が悪かった。そんな秋月の様子に気づいたのか否か、昭吉は呆れた顔で十和を見た。

「何だお前、秋月に話してなかったのか。」

その口ぶりに十和は眉をひそめた。

「確信もなく言う訳ないだろ。：アキ、こいつはな、表向きには町人の振りをして生活しているが、実は国の役人だ。あやかしかぎょう妖奉行と言う：まあ、簡単にいえば俺の上役だ。」

「お、御奉行様！？昭吉さんが：。」

秋月は驚きを隠せなかった。今までずっとお得意様として、両親が死んだ後は保護者のように自分を気にかけてくれていた昭吉が、まさか役人で、しかもかなりのお偉いさんだったとは。にわかには信じがたい。しかしそう考えれば、四神についてやけに詳しかった

ことも十和と知り合いだということも納得できる。

「隠っていて済まなかったな、秋月。しかし民の様子を知るにはこれが一番なのだ。」

昭吉は苦笑していた。秋月は混乱した頭で、必死にことを理解しようとする。

「けれど私、妖奉行という御奉行様がいるなんて、聞いたことがないので……。」

「あまり公にはされておらんからな、当然だろう。妖奉行の仕事は四神たちの管理と妖に関する雑務、処理……まあそんなところだ。」

「妖奉行は仕事柄外に出ることが多いから、あまり知られていない方が楽なんだよ。」

十和が昭吉の説明にそう付け足しをする。秋月はとりあえず頷いて、頭の中を整理した。そこで重大なことに気づく。

……私、もしかなくとも今まで大変なご無礼をしていたのではないかしら。

急に血の気が引いていくのを感じた。

昭吉は青くなっている秋月を横目に、十和に尋ねる。

「ところで、もう城へは戻ったのか。」

「いや、これからだ。」

「そうか。後で殿から話があるだろうが、一応言っておこう。……お前、弓親の娘にはもう会ってきたのか。」

十和は一瞬息を止めて黙った。それから目を細めて昭吉の顔を睨む。

「……何故知ってるんだ、俺が弓親の娘のところに行こうとしていたのを。」

「いいから答えんか。」

「……まだだ。」

そう答えると、昭吉はそうかと言って表情を険しくした。

「実はな、殿が動き始めるぞ。先日、大御所より先に娘を保護せよとわしに命令が下った。殿はお前が娘のもとに向かっていたこともご存知だ。」

十和は椅子の背もたれに寄り掛かり、腕を組んだ。

「相変わらず食えない奴だな、あいつは。」

「殿はまだ若い。しかし才がある。人を惹きつけ統率していく、人の上に立つ者には必要な魅力がある。：これは大御所と殿の全面的な対立になるだろう。お前、何故さっさと娘に会ってこなかったのだ。そうすれば話が早く片付いたものを。」

昭吉は非難の目を十和に向ける。十和はそんな昭吉の視線には怯みもせず、大きなため息をついた。

「俺だって会おうとしたさ。でも出来なかった。俺は一応火守の後継者を探すという名目で外に出ていた。そこで弓親の娘に会いに行ってみろ、後継者は娘だと言ってるようなものじゃないか。」

何故そう思うのか、十和にもはっきりとした理由がある訳ではない。しかし何となくそんな気がして、会いに行くのをためらってしまったのだ。親友の大事な娘である。その娘に、火守という役目を負わせてしまうのは気が引けた。決して悪い仕事ではない。むしろ憧れる者も多い職ではある。しかしその厳しさを、十和は身を持って知っている。男ならまだしも、女ならばその辛さはひとしおかもしれない。普通の娘として生きて行く道があるのなら、その方がよっぽど幸せになれるのではないかと、そう思ってしまうのだ。

そんな十和の考えを見抜いたように、昭吉は小さな声で呟いた。「そうかもしれないが、問題は後継者うんぬんではない。死なれてしまっただけは元も子もないだろうに。」

そう言われてしまっただけは何も言い返せない。十和はすまんと呟き、これ以上何か言われる前にこの話題をいったん終わりにしようと思いを開いた。

「まあ、そこまで急がずとも大丈夫だ。何しろ弓親の奥方が付いているのだから、そう簡単に大御所側に引き渡されることもあるまい。」

俺もすぐに向かうさ。：それよりな、昭吉。頼みがあるんだが。」

口を挟まれないように一気にそう言うと、昭吉はいささか不満そうな顔をした。頼みがあるという十和にしては珍しいセリフに興味があるようだ。何だ、とだけ言って十和が話を切り出すのを待っている。十和は話題を逸らすことに成功し、少し満足げに頷いた。

「アキのことなんだが。これから今まで通り、いろいろ気にかけてやってほしい。」

「十和様…？」

今まで蚊帳の外だった自分の名前がいきなり出されたことに驚いたのか、秋月は慌てたように十和の顔を見た。

「私のことはいいですから。私は一人でも平気ですと、昨日申し上げたでしょう。」

「俺が平気じゃない。アキを一人にしておくのは心配なんだ。俺と一緒にいてやれたら一番いいんだが、そうも言ってもらえないしな。」

昭吉はそんな二人の会話を聞いて、いささか驚いていた。今までずいぶん長い付き合いをしているが、十和に恋人がいたという話は聞いたことがない。少なくとも昭吉が見ていた限りではそんな相手はいなかった。

百年以上も生きてきて、ようやく春が来たか。

考えてみればこれだけ整った顔立ちをしていながら、今まで女の影がなかったというこの方が不思議だ。言い寄ってくる相手はいくらでもいたのだろうが、十和のお眼鏡に適う相手がいなかったのかもしれない。そして今、とうとう選んだのが秋月だったということだ。女を見る目はあるようだと言吉は内心笑っていた。

「そんなことか。それなら言われんでも気にかけてるわ。秋月はわしの娘も同然だ。」

「昭吉さん…。」

秋月は素直に喜べないでいた。今までだったら単純に嬉しくて、

「ありがとうございます」と即座に言えただろう。しかし昭吉が妖奉行だと知った今、“娘同然”とは恐れ多い。そんな秋月の胸中など知る由もなく、昭吉は面白いものを見つけたと言わんばかりに笑顔になり、十和の反応を観察しようと口を開いた。

「しかし珍しいこともあったもんだ。十和に恋人が出来るとはな。いっそのこと、戻ってきたら夫婦にでもなったらどうだ。」

「そのつもりだよ。」

少しも慌てることなく、十和はあっさりと昭吉の言葉を肯定する。秋月はその隣で真っ赤になって俯いていた。余りに予想と違っていた為に、何だか肩すかしをくらった気分である。と同時に、秋月が嫁に行くということが現実味を帯びてきて、何とも言えない寂しさが昭吉の胸の中に広がった。

一方十和は一通りの話は済んだものと判断して立ち上がった。すると弾かれたように秋月も顔を上げる。

「それじゃあ、俺はもう行く。多少は急いだ方がいいようだしな。」

昭吉、アキを頼む。」

「任せておけ。」

「十和様…。」

秋月は十和の着物の袖をぎゅっと掴んだが、すぐに手を離して笑顔に向けた。

「…お気をつけて。」

「ああ…。」

十和は微笑み返した。そのまま秋月に背を向けて店の外へと向かう。秋月と昭吉はその後に続き、店の外まで十和を見送りに出た。

十和の後ろ姿は城の方へと向かってだんだん小さくなっていった。ずいぶんあつけない別れである。

「…十和め、もう少し秋月に言葉をかけてもいいものを。」

「いいんです。」

昭吉のため息混じりの言葉に、秋月は笑ってそう返した。昭吉が

ちらりとその表情を盗み見るが、彼女は何とも穏やかな顔をしていた。その事実には昭吉は驚いた。

「最後ではないんですもの。私は大丈夫です。」

秋月は自分に言い聞かせるようにそう言った。深呼吸をすると、爽やかな空気が胸一杯に広がる。十和は戻ってきてくれる。その約束があるから大丈夫だと秋月は思った。それが何年、何十年だったとしても、いつまでも待っていていられる。そのくらいの覚悟はある。だから自分も今出来ることをしなければならぬのだ。今まで通り薬の調合をしながら、十和の無事を祈る。それが、今の自分に出来ることだと思う。

空を見上げた。抜けるような青空が広がっている。秋の訪れを感じさせる爽やかな風が吹く、ある日の出来事であった。

五話（後書き）

とりあえず、第一章はこれで終了です。

ここまで読んでくださってありがとうございます！

今後は第二章も掲載する予定なので、よろしければお付き合いください。

一話

その敷地内へ足を踏み入れた途端に、今までにこの場所では感じたことの無い何かを感じた。久々にここへ戻ってきて慣れていない所為かとも思ったが、どうやらそういう訳でも無いらしい。この場所に到着してから一時以上も経つというのに、肌を刺すようにピリピリと張り詰めた空気が和らぐ気配は無かった。その空気に耐えかねて、十和は深い溜息を吐いた。

秋月や昭吉と別れて数刻、十和は辰巳城たつみじょうにやって来ていた。いや、戻ってきたと言うべきかも知れない。記憶を失う前に部屋を与えられ、帰る場所としていたのがここだった。かつては弓親もこの城で生活していた。現在では火守以外の四神達が暮らしている。同じ城内にいるはずなのだが、今日のところはまだ彼らに出くわしてはいなかった。

そして今、十和は広い客間に腰を下ろしている。部屋の造りはやはり秋月の家とは比べ物にならない程素晴らしく、隅々にまで気配りがされているのがわかった。城内でもとりわけ広く上品な雰囲気、の漂うこの部屋は、將軍自らが人と会う時に使っていた。

「久しいな、十和。」

十和がしばらく何も言わずにいるので、向かいに座っていた青年が仕方なく声をかける。そこでようやく十和は彼の方へと視線をやった。

今日の前にいる彼こそが、さくらばのりおみ 齢十九にして現將軍である桜庭紀臣だった。一年前に先代の將軍が突然隠居し、跡目を継いだのが彼だったのだが、これがなかなか頭の切れる若者である。評判は今のところ恐らく先代よりも良いだろう。何事にも物怖じせず、堂々とした雰囲気身を纏っている。十和は失礼の無いようにゆっくり頭を下げた。

「長らく連絡が途絶え、申し訳ありませんでした。」

「そう構えるな、気味が悪い。いつも通りにしてくれ。」

紀臣は明るく笑いながらそう言った。気味が悪いとは何だ、と思いつつ、十和は顔を上げる。紀臣の楽しそうな、何か含みのある笑顔が見えた。

「：何だ、その顔は。」

いつも通り、と言われたので十和は遠慮なく口調を崩す。紀臣はニヤリと意味ありげな笑みを一層深くし、持っていた扇子をパチンと鳴らした。

「いや、珍しいこともあるものだな。」

「何の話だ。」

「昭吉から聞いているぞ。好ましい女子がいるそうではないか。」

十和は一瞬顔をしかめる。いつに間に使いを出したのだろう。そんな十和の顔を見て、紀臣は満足そうに笑った。

「狸め、余計な事を言いやがって。」

「いやあ、驚いたぞ、十和。今までお前には浮いた話がなかったと聞いていたからな。昭吉も一見平然としているが、あれでも内心では驚いているのだろう。そう責めてやるな。」

面白がっている紀臣が気に入らず、十和は心の中で舌打ちをした。だんだん昭吉に対する怒りがこみ上げてくる。十和の記憶が確かならば昭吉も若い頃はもう少し誠実な青年だったのだが、月日というものはお人を変えてしまうらしい。

紀臣は一層大きな音で扇子を鳴らした。十和がそちらを見ると、急に真面目な顔つきをする。部屋の中の雰囲気も、まるで彼に合わせるように重くなった。

「ところで十和、弓親の後継者は、まだ見つからないのか。」

いきなり本題に入るのはいわば彼の癖のようなものだった。幼い頃から彼の面倒を見てきた十和は、当然その癖を熟知している。まどろっこしいことを、この若様は極端に嫌うのだ。

「ああ、まだだ。目星も付いていない。」

紀臣に倣って、十和もそれだけを簡潔に答える。紀臣は小さく唸った。

火守であった弓親が死んで二年経つ。その間、残った三人の四神達と鬼守である十和との四人でその穴を埋めてきたが、そろそろ限界が近づいていた。ここ二年で妖の出現率は急増している。一刻も早く新たな火守を見つけなければならなかった。

「：目星も付いていないとは、果たしてどうか。」

紀臣が聞き取れるか否かの小さな声でつぶやく。十和は無言で紀臣を見、彼が言葉を続けるのを待った。

「十和ならもうとうに思い当たる人物がいるはずだ。それこそ弓親が死んだ時から。」

「お前らしくもない。ずいぶん遠まわしな言い方だな、何が言いたい？」

「分からぬお前ではないだろう。それとも記憶を失っている間に頭の動きが鈍くなったか。」

このクソガキ、と心の中で悪態をついて、十和は顔をしかめた。いけ好かない物言いに対してもそうだが、今はそれ以上に紀臣の勘の良さが気に食わない。

「：弓親の娘のことか。」

十和が言うと、紀臣は無言で扇子を鳴らした。どうやら肯定の意味合いを含んでいるらしい。

「あの娘に火守をやらせる気は無い。」

十和ははっきりとそう言い放った。すると紀臣は眉を寄せる。

「ほう。では何故お前はその者に会いにいかうとしたのだ。火守の件が急を要することはお前が一番分かっているだろう。鬼守としてお前が今優先すべきは火守の後継者を探すこと。そうと理解した上で娘に会いにいかうとしたということは、お前自身、娘を火守にするという可能性を完全に捨て切れていない証拠だ。」

「本気で言っているのか。あの娘はまだ十六だぞ。火守をやらせるには若すぎる。」

「何を言うか。颯介が風守になったのは十五の時だぞ。」

「男と女では訳が違う。」

あくまで取り合おうとしない十和の態度に、紀臣は少し不機嫌そうな表情を浮かべた。

十和は知ったことかと知らんふりを決め込んだ。娘の事情を考えると、どうしても彼女をこの城に近づける訳にはいかない。

睨み合いを続けてしばらく経った。十和が頑なな態度を変えないということが分かり、紀臣の方がふっと溜息をこぼす。

「頼む、十和。協力してくれないか。大御所がその娘を先に見つければ、娘の命は無いも同然。それだけはどうしても避けたい。」

その言葉を聞き、十和は眉をひそめた。

「娘の命が危ないことは分かる。だが、どういうつもりだ？何故お前がそこまでしてあの娘を助けようとするんだ。面識は無いはずだが。」

「勘違いするな。別に娘を助けることが重要なのではない。ただ大御所のやり方が気に食わないだけだ。」

紀臣は心底不機嫌な顔をして見せた。彼の手の中で扇子が忙しく動いている。相当不満が溜まっているようだった。

紀臣は幼い頃からずっと乳母や周りの家臣達に育てられたこともあり、実の父である大御所（当時は将軍）とはあまり接触が無かった。物心付いた頃には既にそうであったから、彼は自分から父親に近づこうとはしなかったし、大御所の方もあえて彼を気に掛けることも無かった。

しかしある程度成長して政治のことも少しずつ分かってくるようになると、状況はまた変わっていった。昔ならば耳に入らなかったような、父親の政策に対する世間の評判がやけに耳に付くようになったのだ。「政治は民のためにするものだ」と教えられて育った紀臣にとっては信じられないような、悪政と言っても過言ではないほどの政治。初めのうちこそ何故父はこんな政治をするようになってしまったのかと疑問を感じていたが、周りの大人たちが自分に気を

使って話さなかったただけだったのだと気づくまでに時間はかからなかった。

以来紀臣は表には出さないものの、父親に対する不信感や反発を持ち続けている。それが表面化したのが一年前、彼が將軍職に就いた頃であった。まず父親と同じような思想を持っている家臣を少しずつ重職から外していき、代わりに昔から自分に世話を焼いてくれた者を要職に就けて、彼自身の派閥を大きくした。もちろん十和もその派閥の一人である。紀臣の教育係をしていたのが十和だったのだ。

その後は父親のしいた圧政的制度を撤廃し、大御所という立場を父が利用しない様、目を光らせてきた。今回の弓親の娘のことも、紀臣にとってはその中の一つにすぎない。

「俺は大御所のやることを何とかして阻止せねばならん。それは己自身の為でもあり、この代々続く桜庭家の名を汚さぬ為でもあるのだ。それは結果として娘を救うことにもなる。お前だって娘を救いたいのだろう。だったら何の問題もないはずだ。」

どうだ、と尋ねられて十和は答えにつまった。確かに利害が一致しているのだから、ここで紀臣に手を貸すのも悪くはない。むしろその方が堂々と動けるといふものだ。それに何より、十和は紀臣の「お願い」には弱い所があった。紀臣は普段あまり人を頼らない。その分、たまにされる「お願い」は絶大な効果を持っているのだ。そして性質の悪いことに、紀臣自身、そのことを熟知した上で「お願い」するのである。

「：わかった。大御所側の人間よりも先に娘を保護すれば良いんだな。」

紀臣は彼独特の含みのある笑顔を見せた。

「そうか。協力してくれるか。」

「ただし、」

そう言いながら、十和はゆっくりと立ち上がった。

「その娘を火守にするかどうかはまた別の話だ。」

紀臣は十和の顔を無表情でじっと見上げた。しばらくして、再び口角を上げる。意地の悪そうな笑顔だった。

「良いだろう、好きにしろ。どちらにせよ四神関係の決定権はお前にあるのだ。」

相変わらずの強気な態度だ。十和は何か言おうと口を開きかけたが、途中で考え直して口をつぐみ、そのまま部屋を辞した。

またさらに母親に似てきたな。

十和は先ほど飲み込んだ言葉を心の中で呟いた。紀臣の母とは前御台所であり、現在は出家して芳徳院ほうとくいんと名乗っている。一見人あたりが良く穏やかな性格の、目元の涼やかな美人である。しかしその実、笑顔の下に様々な意図を隠した策略家でもあった。紀臣はそんな母に見た目も中身も大変な影響を受けているらしく、さっきの腹黒い表情はまさに芳徳院そのものだった。

芳徳院に似ている、ということは、紀臣もやはり美人ということである。しかし誰もが羨むような整った顔立ちをしているにも関わらず、紀臣にとってはこの「女顔」がコンプレックスなのである。彼の前でその容姿について触れることは、たとえそれが褒め称える言葉であったとしてもご法度だった。

あそこでついそんなことを口走っていたら、1週間は口をきいてもらえなかっただろうな。

面倒なことにならなくて良かった、と心から思う十和であった。

一話（後書き）

作中、「男と女では訳が違う。」という言葉がありますが、これはあくまでこの話の世界観や時代背景においての言葉ですので、決して男女差別を支持する意図がある訳ではありません。

不快に思われた方がいらっしやいましたら、深くお詫び申し上げます。

二話

応接間から離れたところまで来て、十和はようやくふう、と息を吐いた。肩に妙な力が入っていたらしく、変なだるさを感じる。とりあえず、一番の厄介事は片付いた。そう考えると早くも次の厄介事が脳裏をかすめた。

いや、今は考えるのはよそう。軽く左右に頭を振って、次から次へと浮かんでくる嫌な考えを追い出そうとした。とにかく自室へ戻って一休みしよう、このまま廊下にいたのでは、いつ次の厄介事にいくわすか知れたものではない。自分が城内にいるとなぜか、身の回りが騒がしくなるような気がする。そう思いながら神出鬼没なある人物を思い浮かべ、十和は人知れず溜息をついた。まさかそんなことあるはずもないが、噂をするどころか思い出しただけでも姿を現しそうな気が…。

「あつれえ、なんか十和さんに似てる人がいる。」

そんな声が耳に届いた瞬間、体が硬直した。まさか、そんなはずはない。これはきつと空耳だ。頭ではそう思い込もうとしながらも、十和は気付かぬ内に顔をしかめていた。嫌な予感をひしひしと感じつつ、ゆっくりと振り返る。半ば祈るような気持ちであった。

しかし。目に映った見慣れた少年の姿に、十和はあからさまに肩を落とす。後ろの高い位置で結ばれた真っ黒な髪、左目の下に泣き黒子のある顔。何度も見ているその顔を誰かと間違えるはずもなかった。ついに見つかってしまった。

「…颯介そうすけか。」

十和のがっかりした声とは裏腹に、颯介と呼ばれた少年は顔いっぱいにも明るい笑顔を見せた。

「あ、やっぱり十和さんだ。全然音沙汰ないから心配してたんだよ。」

今までどこで何してたんだよ。」

すぐ近くまで駆け寄ってくると、当たり前のように隣に並んで歩きます。十和がどこに向かっていようが彼には関係ないようだった。無邪気な笑顔を十和に向けているこの少年の名は颯介。現在十七歳、最年少の四神である。以前から彼は誰よりも十和に懐いており、同時に十和にとっての厄介者の一人であった。

「姿を見なかったからてっきりいないものと思っていたが……いたのか。」

あまり、いやかなり嬉しくなさそうな十和の様子に、颯介は心外だと言わんばかりに口をとがらせた。

「何だよそれ、いちやいけないみたいに。今ちようど城下から帰って来たんだ。」

「城下？……また何のために外へなんか。」

そう尋ねると颯介は表情を一変させて悪戯っ子のように笑った。こういう表情を見る度に、彼は本当に十七歳なのだろうかと疑念を抱く。実は逆サバをよんでいるのではないかと、十和は密かに思っている。

「やだなあ、目的なんてあるわけないでしょ。ただ城の中にもつままないしさ、暇潰しだよ、ひ・ま・つ・ぶ・し。」

昭吉さんには内緒ね、と念押しする彼に、十和はただただ呆れた目を向けることしか出来なかった。

四神の仕事は何をおいてもまず妖退治である。いつ仕事に行けと命令が下るかわからない状況なので、外出するときはまず上司の許可を得てからというのが決まりだった。上司とはつまり妖奉行のことで、今それにあたるのは昭吉だ。とは言っても彼は城下で町人になり済まして生活しているので、代理の者が用件を聞き、随時知らせに行くことになっている。その昭吉に内緒ということは、要するに掟破りをしているということ。ちなみに掟破りは颯介の十八番だった。

十和の表情を見て颯介は再び口を尖らせる。

「だって仕方ねえじゃん。みんな忙しそうにしてるから邪魔も出来ないし。」

「忙しそう？何かあったのか。」

「ありましたとも。誰かさんがずっと帰ってこないもんだから、その分の仕事がいろんな人に回されてね。」

あー大変、とわざとらしい口調で言っ、颯介はちらりと十和を見る。反論したくとも、この件だけは何も言えなかった。

「いや、それは申し訳ない…。」

「別に俺はあんまり忙しくなかったからいいんだけどさ。…あ、でもあの話はどうなるんだろう。」

ちょうど十和の部屋の前に着いたところで二人は立ち止った。一人部屋にしてはやや大きいように感じる襖に手をかけて、十和は改めて颯介の方に顔を向ける。

「あの話？」

スツと静かな音を立てて襖が開く。

「うん、そういえば俺のところにも一個だけ話が来てたんだ。十和さんの代理の仕事。」

そう言いながら、中に入って行く十和に続いて颯介も部屋に中へと足を踏み入れる。まるで自分の部屋に入るかのごとく、ごく自然に。

「俺の代理…。って、おい。何当たり前のように入っ来てるんだ。」

十和が咎めるように颯介を止めれば、「えー。」と不満の声が上がる。

「いいじゃん別に。減るもんじゃなしに。」

「減る。俺の気力と体力が確実に減る。」

「何言ってるの、鬼守のくせに。それに代理の仕事、気になるんじゃないの。」

鬼守は関係ない、と思いつつ、ぐっと口を噤む。確かに仕事の内容は気になる。そうやって十和が制止する手を緩めている間に、颯

介は十和の脇をすり抜けて部屋の中へ入っていった。窓枠にもたれかかるように座り、にっこりと十和の顔を見上げている。こうなってしまうとなかなか帰ってくれないということを、十和は今までの経験から良く承知していた。今まで一体何度、彼を部屋から追い出そうとして無駄な労力を費やしたことか。結局颯介を追い出すことを諦め、恨みがましく一つ溜息を吐いてから部屋の戸を閉めた。

「…で、どんな仕事だったんだ。」

十和は颯介と向かい合う位置に腰を下ろした。それを相変わらずの人懐っこい表情で眺めながら、颯介はうんと頷き、話し始める。

「話を聞いたのはつい三日前だけだよ。もし十和さんがあと十日以内に帰らないようだったら、代わりに弓親さんの娘を迎えに行けて。」

「何だって、お前が？」

「そう。変な話だよな。何で弓親さんの娘をここに連れてくる必要がある訳？ 今最も優先すべきなのは火守の後継者を見つけることだよ？ まさか、本当にその娘を後継者にしようって魂胆じゃないよな。」

後半は冗談を言うように笑いながら話す颯介。そのなかなか鋭い指摘に十和は一瞬動きが止まったが、颯介がそれに気付いた様子はない。気付かれないように小さく息を吐き出して、十和は「まさか」と言っておいた。今はまだ、彼女の事情を知られる訳にはいかないのだ。その相手がたとえ風守であったとしても。

それにしても以外だったのは、十和の代役を颯介にやらせようとしていたことだ。確かに他の者に行かせるよりは、馬にも乗れて小回りも利く颯介に行かせるのが一番速い。しかし彼は弓親の娘の事情は全く知らされていないのだ。いや、彼だけではなく、今の四神達は彼女について何も知らされていない。そのため、大御所や紀臣がその娘を巡って対立している理由としては、『その娘を弓親の後継者にしようとしている』というのが一番有力な説となっていた。半分は当たっている。しかしもう半分の理由を知るのは、ほんの一

握りの者だけであった。もちろん、意図的にごくわずかな者にしか知らせていないのである。だからこそ弓親の娘を迎えに行く役目を颯介にやらせるべきではない。颯介は優しすぎるところがあると十和は常々思っていた。彼がその娘と関わらないでいられるのならその方がいいに決まっている。四神という立場であるのなら、なおさらのことだ。誰から見てもそのことは明白であった。

それなのに彼に命が下ったということは、今回は、十和が思っているよりも急を要するらしい。

「…なあ、十和さん。」

颯介はふと真剣な口調で十和を呼んだ。十和が彼の方へ顔を向けると、同様に真剣な目が十和を見据えていた。

「あのさ、なんか隠し事してない？」

十和は唸り声をあげそうになった。こいつは無駄に勘が良くて困る。

「何を言うのかと思えば。そりゃあ、俺にだって言えないことの一つや二つあるさ。」

「そうじゃなくってさあ。今回の、弓親さんの娘のこと。」

十和はあくまで何のことか分からない、という態度を貫こうとした。「どういうことだ」と言おうとして口を開きかけると、その前に颯介が待ったをかける。

「惚^{とぼ}けんのは無しだぞ。俺だってそんなに馬鹿じゃない。今回の件は矛盾だらけだ。」

颯介の顔はいたって真面目である。いまだかつてここまで真面目な彼を見たことがあっただろうか。いや、なかったはずだと思うと、十和は感動すら覚えた。

「颯介。お前、そんな真面目な顔出来たんだな。」

「失礼だな。っつーか、話逸らすなよ。」

十和は一つ舌打ちをする。ばれたか。こんな手に引っ掛かるほど颯介も馬鹿ではなかったらしい。ちら、と颯介の顔を見れば、眉間にしわを寄せてじっと十和の顔を見つめている。どうやら逃れるこ

とは出来ないようだ。しかしだからと言って真実をそのまま話してやることは出来ない。どうしたものかと考えた結果、彼の質問に答えるという形式をとることにした。聞かれたことにだけ答え、余計なことは言わない。颯介も納得するだろうし、一番の得策のように思えた。

「…で、何が聞きたい。」

「そうだなあ。じゃあまず、何で弓親さんの娘にこだわるのか、ってこと。」

やっと答える姿勢をとった十和に満足そうな笑みを浮かべ、颯介は一つ目の疑問を口にした。

まず、と言っておきながら、事の全てを説明させるような質問を投げかけてくる。なかなか知恵をつけたものだ。十和は感心した。「今、火守の後継者探しが最優先事項だということは知っているな。上の者達は、何も無いところから探し始めるよりは、その関係者をあたった方が見つけやすいとも思っているんだろう。」

「だけど、今まで四神の力が世襲された例ってあんまり無いんだろ。」

「多くはないが、無くもない。上の連中にとってはいかに早く後継者を見つめるかが重要なんだ。いつまでも火守の死を隠しておける訳じゃないからな。僅かな可能性にだってすがりたい気分なんだろう。」

しかし颯介は不満そうな顔をしている。十和としては嘘は付いていないので、何ら後ろめたいことは無い。その不満げな表情には気付かないふりをした。

「…じゃあさ、質問を変えるけど。大御所様は何で、その娘を始末しようとしている訳？」

十和はその瞬間、目を細める。何故それを知っていると問い詰めたいが、それでは墓穴を掘ることになる。將軍だけでなく大御所までもが娘を手中におさめようとしている理由。それは一般的には、

その娘を後継者と認めていないためだということになっていた。現將軍である紀臣とその父である大御所の対立は世間に知られるところである。紀臣がその娘を火守にしようとしていれば、大御所がそれを阻止しようとしても誰も疑問に思わなかった。

まるで睨むような十和の視線を受けて、颯介は肩をすくめた。

「そんな怖い顔しないでよ。でも、そういう反応するってことはこの噂は本当だってことだよな。」

「呆れてるんだよ。どこからそんな噂を聞いてきたのか知らないが、その程度の話なら誰だって憶測で語れるだろうが。あの親子の不仲は有名だからな。」

「でもさあ、ただそれだけの理由で始末なんて物騒な話になるかなあ。戦乱の世ならともかく、今は天下太平の世だぞ？」

「だからこそだろう。天下太平の世とはつまり政治的戦略がものを言う時代ってことだ。裏で手をまわして最小限の兵力で邪魔者を排除する。戦慣れしてない者にとって、これほど正確で効率の良い手はない。」

自分の言っている内容に一つも嘘がないことに、十和は驚いていた。颯介が始末という言葉を口にしたときは内心焦ったが、こうも上手く話を進められるとは。嘘はついていない。ただ中核の部分を伏せたままにしているだけである。

しかし颯介は納得できない様子で、うーんと切れ味の悪い唸り声をあげた。

「それは分かるけど。俺はさ、なんかその理由には、その娘自身のことに関係してるんじゃないかなあって気がするんだよ。親が弓親さんだから、とかじゃなく。」

なんて勘の冴える奴だと十和は舌を巻いた。颯介のことだからきつと確証があつてそう言っている訳ではないのだろう。ただ、今までの経験から言って彼の勘は良く当たる。そのことを本人も良く知っていた。そして今回も見事に当てて見せている。

「弓親の娘自身、ね。」

十和が呟くと、颯介は一度頷いた。が、口を開こうとはしない。十和がどんな反応を見せるのか待っているように、ただじっと十和の顔を見ていた。

正直なところ、颯介には何も教えたくないというのが十和の気持ちである。何度も言うが颯介は心根の優しい少年だ。本当のことを知れば、そのせいで心を痛める可能性もある。出来ればそういうことにはしたくない。しかし、これ以上隠すのは難しいようだ。

「…仕方ない。正直に言おう。確かに俺はお前に隠していることがある。お前だけじゃなく、他の四神達にも話していない。これはこの国一の機密事項ということになっているから、悪いが教えることは出来ない。」

「何だよそれ。俺たちにも言えないって…。」

「まあ待て。話は最後まで聞け。」

むっとした颯介は文句を言おうとしたが、十和はそれを宥める。颯介はまるで子供のようにむすっと顔をしかめ、しぶしぶ口を閉じた。それを確認してから十和はゆっくりと言った。

「娘のことを大っぴらに話すことは出来ない。その代わり、面白い話を聞かせてやろう。」

「面白い話？」

「ああ。」

不思議そうに首をかしげる颯介に、十和はにやりと不敵な笑みを浮かべた。そして小さい子供に聞かせるように、一語一語丁寧に話し始める。

嘘のようで本当の話。一度聞いたら最後、もう後戻りは許されない。

三話

昔、ある男がいた。彼は武芸の盛んな家の次男として生まれたが、幼いころから病弱で、成人するまでに何度か三途の川を渡りかけていた。成人した後、男は重い病に侵され、治る見込みはないと医者に言い渡された。長くても半年、短くて三カ月。しかし男はそれほど落胆しなかった。もともと自分が長生き出来ないであろうことは分かっていた。ただ心残りがあるとすれば、彼は一度も遠出をしたことがない。一度は村から遠く離れてみたい。そう思った男は、身体動く内と言って平癒の願掛けで有名な神社へ参詣することにした。その神社までは馬に乗っても二日はかかる場所にある。当然馬になど乗れない彼は、家族の猛反対を押し切り、丸十日かけて神社のある山の麓までやってきた。山の中へ足を踏み入れた頃にはもう日が暮れていた。

辺りが暗くなってもお構いなしに、男はひたすら歩く。そうして1時間がたった頃、山の中を進んでいく男の目の前に、突然一人の女が姿を現した。月明かりに照らされた髪は不思議と赤く光を反射し、真っ直ぐ男の方を見ている藤色の瞳には猫の目のような細い線がある。そのまま視線を彼女の耳に移したところで男は確信した。

この女は鬼だ。

そうと分かってもどうすることも出来ない。走って逃げてもこの病弱な体では簡単に追いつかれてしまうだろう。これまでか、と深いため息が男の口からこぼれた。どうせ半年後には死ぬ運命なのだ。そんなに惜しい命でもない。そう思った途端、彼の体から力が抜けた。慣れない遠出をし、根をつめて歩いたのがいけなかったようだ。今までの疲れが一気に出たらしく、そのまま地面に倒れ、ついには意識を手放した。

「…それで、その男は鬼に喰われちゃったの？」

颯介は彼にしては控えめな声で尋ねる。十和は首を横に振った。

「その鬼は何故か男を喰わなかった。それどころか男を自分のねぐらに連れ帰って介抱したらしい。」

「えっ…鬼が人間を？」

「ああ。詳しい話は分からないが…余命半年を言い渡されていた男は、そこで鬼と三年間共に暮らしたそうだ。」

颯介は「三年も」と呟く。どうやらあまり納得出来ていないらしい。無理もない話だ。十和とて、人間と共に生活した鬼の話などそう聞いたことのあるものではなかった。

「男が死んだと知れたのは、男の死後、鬼が彼の兄の元へ姿を現したからだ。鬼はその時、あるものを抱えていた。」

「あるもの…？」

颯介はいつになく小難しい顔で話を聞いていた。無意識にはあるが、話が核心に迫って来ていることを薄々感じ取っているのかも知れない。十和はそんな颯介にやはり真剣な視線を返し、慎重に口を開いた。

「赤ん坊だよ。」

ひゅ、っと息を飲む音が響く。そんな些細な音が耳につく程部屋の中は静まり返った。音の出所はやはり颯介である。驚きに目が開かれ、呼吸をするのさえ忘れている様子である。予想以上の反応の良さに十和は口元を緩ませる。やはり、こいつは勘が良い。

「あのさ。」

ようやく呼吸をするということ思い出した颯介は、大きな深呼吸をした後で言った。

「まさかとは思うんだけど。弓親さんの娘の話をしているときにその話をし始めるってことはさ、つまり、その赤ん坊って…。」

颯介は最後までは言わなかった。十和が意味ありげな笑みを浮かべていたからだ。肯定の言葉がなくとも、その表情が全てを物語っ

ている。

呆氣にとられてゐる颯介を尻目に、十和は立ち上がった。迷いもなく部屋の戸まで進み、スツと滑らかな音を立てて襖を引く。颯介の方を振り返ると、彼はまだぼかんと十和の行動を眺めていた。

「何してる。行くぞ。」

「…はい？」

「ほら、さっさと立て。出かけるぞ。」

十和に促され、颯介は訳が分からぬまま立ち上がって十和に続き部屋を出た。長い廊下を突き当たって右に曲がる。十和は颯介が後ろからついて来ているのを振り返らずに気配で確認した。途中、袴かみしもをつけたいかにも役人といった風の者と何度かすれ違う。彼らは二人を見ると立ち止まり、恭しく頭を下げた。四神という立場にある二人は、他の役人とは別格の待遇を受けている。身分と言う点ではそこまで高い位にいる訳ではない。しかし彼らのもつ特別な力は、身分とはまた別の「敬うべき対象」という印象を人々に与えている。その為城内ですれ違う者の大半はこうして二人に対し礼を尽くしてくる。もう長い間城にいる十和はそこまで気にはしないが、颯介は居心地が悪そうな複雑な表情を浮かべ、そのたびに「どうも」と頭を下げ返していた。

颯介は城下町よりも西の方角にある町の武家の三男である。もともとそう身分が低い訳ではなかったが、彼の上には二人の兄と一人の姉がいた為に、ここまで慇懃な態度をとられることは滅多になかった。さらにそう接してくる相手は皆自分よりも年上ということもあり、何となく落ち着かないようだった。しかし彼がこの城に来てから三年経つ。一向に慣れる気配の無い様子に、十和は呆れつつも笑みをこぼした。いつまでも他に染まらない颯介を純粹に好ましく思う瞬間でもある。その十和の笑った顔に気付いた颯介は、むっと顔をしかめる。

「で。いきなりどこへ行こうっていうのさ。」

屋敷の外に出たところで颯介は少し歩みを速め、十和の隣に並んだ。それを横目で見ながら十和は勤務中の門番に軽く手を上げて合図をし、城門をくぐる。外に出ると城の周りに巡らされた堀を流れる水の音が静かに響いていた。二人はそのまま城下町の方へ足を向ける。

「まずは昭吉のところだ。外出許可を貰わなくてはな。」

「いや、だからどこへ外出するんだって聞いてんだけど。」

うまく意思疎通が出来ていないことにもどかしさを隠そうとせず、颯介は言った。それを聞いた十和はわざとらしく驚いた表情を作り、まじまじと颯介の顔を覗き込む。

「何だお前、分からないのか。今までの話の流れからして、行く場所は一つしかないだろう。」

まるで馬鹿にしているような、からかうような口調である。どちらにしても十和はこの状況を楽しんでいるようで、颯介を巻き込むまいと悩んでいた先程までの様子は見る影もなかった。いつもは飄々としている颯介が驚き混乱する姿をみるのが案外面白かったのである。その十和の胸中を知る由もない颯介は、諦めたように一つ溜息をついた。

「：分かってるけど、ただ確認したかっただけ。どうせ、弓親さんの娘のところに行くんでしょ。本当に今から行くの？俺も一緒に？」

「今は時間が惜しいし、協力者は一人でも多い方が良い。」

「だったらもっと早く城に帰ってくれば良かったのに。本当に一体どこで何してたんだよ。」

十和はその質問には答えず、少し歩調を速める。都合の悪いことは聞こえないふりをするのが一番だ。

涼しげな水のせせらぎが虚しく辺りに響いていた。

「それで外出の許可がほしいという訳か。」

一通りの話を終えて、昭吉は一口、熱い茶をすすった。数分前に店先に顔を出した十和と颯介の為に秋月が入れたばかりの茶である。数時間前に十和と別れた秋月は、まだ帰らずに店の中で昭吉とおしゃべりをしていたところだった。湯呑みからはほかほかと湯気が立ち上っている。

「そういうことだ。もちろん、許可してくれるんだろう。」

十和は茶には手をつけずに昭吉の顔を窺い見る。腹の内を探るような視線を交わす二人の横で、所在無さげにしていた秋月は自分の正面に座る少年に目をやった。十和の横で大人しく茶を飲んでいる彼は、二人のやり取りに戸惑う様子もなく、のんびりと傍観者を決め込んでいる。まだ少し幼さの残る外見とこの状況にすっかり慣れている様子から、この少年が噂の風守なのだろうと秋月は考えた。

ゆっくりとした動作で湯呑みを置いた颯介はふと秋月の方を見る。まだ彼を観察していた秋月は目を逸らすことも出来ず、二人の視線はがっちり合わさった。颯介は一瞬きよとした表情をした後、にっこりと人懐っこい笑顔を見せた。笑うと更に幼く見えるな、と秋月はぼんやり思った。

「初めまして。俺、颯介っていうんだ。これでも一応風守です。」

颯介はよろしく、と軽く頭を下げた。噂によれば彼は十七歳のはずだが、受ける印象は随分幼い。可愛らしい人だと思うと、秋月の頬は自然に緩んでいた。

「初めまして。私は秋月といいます。この近くの山に住んでいます。」

「そっか、秋月さん、ね。」

「アキでいいですよ。秋月では長くて呼びづらいでしょう。」

そう提案すると、颯介は素直に頷いた。このあどけない少年が妖

と戦う力を持つ風守とはとても信じられない。特別背が高い訳でもないし、がたいが良い訳でもない。力だってそう強そうには見え、彼の腰にある大小の刀だけが、彼が剣術に通じる者だということを証明していた。どこにでもいそうな普通の少年。それが秋月の颯介に対する第一印象であった。

―けれど、そう言えば十和様だって鬼守には見えなかったもの。人は見かけによらないのだわ。

実はこう見えて颯介はかなり力が強いかもしれないし、想像もつかない程凄腕の剣士なのかも知れない。そう思って再び颯介を見ると、彼は相変わらずニコニコと笑顔を見せていた。やはり見た目通りなのかも知れないと、失礼とは思いつつもそう感じてしまう。

「許可を出す前に一つ質問がある。」

昭吉の鋭い声が耳に入る。彼のこんな声を聞くのは初めてのことで、秋月は少し肩を縮こませた。昭吉は険しい表情で十和を見据えており、いつもの優しい彼とは全くの別人のようだった。これが妖奉行としての昭吉の姿、言ってみれば本来の昭吉なのかも知れない。そう思うと寂しいような恐ろしいような気持ちになって、秋月は視線を自分の掌に落した。

「お前が弓親の娘の所へ行くのは構わん。むしろ早く行けと言いたいぐらいだ。しかし、何故ここに颯介まで連れてきた。まさかいつまで連れて行くというんじゃないかな。」

すると十和はにやりと不敵な笑みを浮かべた。これも秋月の見たことのない表情だった。今まで十和が秋月に向けていたのは裏も表もない、ただただ優しい眼差し。今のような顔は、出来れば今後とも自分には向けてほしくないものである。

「そのまさかだ。俺が戻らなかつたら颯介が娘を迎えに行くことになっていたらしいから、ついでに手伝ってもらうことにした。」

「颯介を巻き込むことには賛成でみんな。」

「今更だよ。はっきりと教えた訳じゃないが、こいつだって事情は

薄々感づいてる。もうとつくに巻き込まれてるさ。」

昭吉はむう、と唸り声をあげる。どうしても颯介を弓親の娘に近づけることには抵抗があるようだ。

「昭吉さん。」

今まで黙っていた颯介が口を開く。昭吉が颯介の方へ視線を向けると、彼はやはり笑っていた。

「俺のこと心配してくれてるのはありがたいけど、大丈夫だから。もしその娘と戦わなきゃいけなくなったとしても、俺は皆を裏切ったりしないよ。」

その言葉に昭吉は何も言えなくなる。確かに颯介は自分の立場を良く理解している。もしその娘と仲良くなった後、鬼の娘であるが故に彼女を始末しなければならぬ状況になっても、彼は迷うことなくその刀を抜くのだろう。決して自分の仕える主を裏切るようなことはしない。颯介はそういう奴なのである。しかし、だからこそ心配だった。そうなった時に一番心を痛めるのもまた颯介なのだ。十和が颯介に事情を話すのを渋ったのも同じ理由からである。

普通の娘であつたのならば、こんな心配はしなくて済む。しかし、残念なことに彼女は普通の娘ではないのだ。戦う可能性はゼロではない。

「本当にいいのか、颯介。」

昭吉は念を押すように颯介に尋ねる。出来ればここで思いとどまってはいい、とでも言いたげな表情をしていた。そんな彼に、颯介はまた苦笑をうかべて頷いてみせる。

「俺も一応武家の人間だし。男に二言はないよ。」

「…そこまで言うなら仕方あるまい。わかった。許可すればいいんだろう。」

「悪いな、昭吉。」

昭吉が溜息と共に答えると、十和はちっとも悪びれずにそう言った。昭吉が恐ろしい顔で十和を睨んでいるのを、秋月はしっかりと見た。見なければよかった、と後悔するほどの表情だった。

十和は湯呑みに入っている茶を一気に飲み干すと、すぐに立ち上がった。颯介はそれにならって慌てて湯呑みを空にし、続けて立ち上がる。

「それじゃ早速行くでしょう。梅雨つゆと主峰しゅほうに、後は頼むと伝えておいてくれ。」

「無理はするなよ。何かあればすぐに連絡しろ。」

「わかってるさ。」

それだけ言ってさっさと店を出て行く十和の後ろ姿を、秋月は少しだけ寂しそうに見送った。十和がこの店に来てから出て行くまで、秋月の方を向くことは一度もなかった。

颯介は秋月の横顔と十和の背中を見比べ、二人の関係を何となく察知する。人間観察は彼の趣味であり特技であった。

「…それじゃ、俺も行くよ。昭吉さん、十和さんには俺がついてるから心配しないで。」

「何を言っとる、お前がいるから余計に不安なんだろうが。今日も無断で外出しおって。」

「え、やだなあ気付いてたの？目敏いんだからなあ。…おっと、そろそろ行かないと本当に置いて行かれる。じゃ、アキさん、お茶ありがとう。またね。」

「あ、はい。お氣をつけて。」

秋月が笑顔でそう言うと、颯介は満足そうににっこり笑って十和の後を追った。

先に店を出た十和との間には結構な距離ができていた。どうやらこの男は颯介がついて来ていないことなど気にも留めていなかったらしい。そういう扱いはいつものことですから慣れてしまっていた颯介は、やっとの思いで十和に追いつくと、横から顔を覗き込んだ。

「…なーんだ、平然としてやんの。つまらないなあ。」

十和が横目でちらりと颯介を見る。颯介は頭の後ろで手を組んで、

言葉とは裏腹に楽しそうに笑っていた。どの口がそんなことを言っているのかと睨んでみれば、颯介は更に笑みを深くした。

「ずいぶんあっさりとアキさんと別れたからさ、どんな顔してんのかなあと思ったんだけど。アキさんって、十和さんの恋人でしょ？もうちょつと名残惜しんでもいいんじゃない？」

「誰から聞いた、そんなこと。」

「誰からも。ただ何となくそう思ったただけなんだけど、やっぱ俺の感って冴えてるなあ。」

颯介は満面の笑みでそう言う。楽観的な所は彼の長所であるが、お気楽過ぎるのも困りものだ。十和はため息をつきそうになる。彼はこれから自分たちが何をしに行くのか分かっていない。まるで近所に散歩にでも行くような足取りである。

「少しは気を引き締めて行けよ、颯介。場合によっては大御所側の人間と鉢合わせになる可能性もある。最悪刀を抜くことになるかもしれないぞ。」

少し注意を促すつもりで言った言葉は、どうやら思った以上に効果があったようだ。颯介は驚いた様子で目を丸くして、頭の後ろで組んでいた手を解いた。

「え、刀を使うって…戦うのか？仮にも同じ幕府側の人間と？」

「その可能性も無きにしも非ずということだ。」

「えー…何かそれおかしくないかあ？」

答えを求めるような颯介の視線を感じながら、十和はあえて何も言わなかった。颯介は十和の様子にただならぬ何かを感じたのか、急に真面目な顔になって探るような目で十和をじっと見つめた。

「…十和さんの目的って一体何？いつも無駄な争いはするなって口うるさく言ってるあんたが、まさか上様に命令されたくらいでそんなこと言うようになるなんて思えないんだけど。」

「そんなに大それたことじゃない。ただ、俺は俺のやり方で弓親との約束を果たすだけだ。」

おしゃべりは終わりだと言わんばかりに、十和は更に歩みを速め

る。颯介は一定の距離を保ったまま、十和の背中を追いかけた。
「弓親さんとの、約束…？」

そう呟いた颯介の声にも、十和は気付かないふりをした。颯介の
その声に、若干の不安が含まれていることを知りながら。

三話（後書き）

サブタイトルになっているというのに娘がなかなか出て来ません…。
次こそは出せる！…はず。

四話

城下町から西の方角へ馬で5日ほどかかる程度に離れたところにその村はあった。村の更に西側にはこの国で最も商いが盛んだと言われる町があり、その町から城下町へと向かう商人たちの通り道としてこの村はそこそこの賑わいを見せている。村の北側は低い山々に面しており、そのうちの一つは神が住まう山として古くから重宝されてきた。遠く離れた地から願掛けに訪れる者も少なくない。何でもかなりの昔に、尊い身分の男が病を患い、夢で神託を受けてこの山にある神社へ訪れたところ、医者にも見放されていた病が程なくして完治したのだと言う。以来この山は、無病息災の御利益がある山として知られるようになった。それが本当の話であるかは別として、件の神社は実際にこの山の中腹に存在している。

その神社の鳥居の前で、馬にまたがり佇む少女がいた。一つに束ねられた髪はときどき風に吹かれて大きく揺れた。少女はじつと鳥居の奥を見つめている。彼女の背には、彼女の物にしてはやけに長い弓があった。

「神のいる山……か。」

静まりかえった山の中で小さく呟かれた言葉はやけに響いた。彼女のまたがっている馬がぶる……と口を鳴らして何度か足踏みをする。少女は馬の頭を撫で、どうどうと宥めた。

「お前もここが嫌いなんだね。私も嫌いよ。神がいるなんて、嘘ばかり。」

人々はあるがたがってこの場所を崇める。「神聖な場所だ。」と言ってこの神社より奥へは決して足を踏み入れようとしない。人の立ち入っていい領域ではないなどと言う。

けれど。彼女は目を細め、まるで睨むように山の上へと視線を移した。私は知っている。この山の奥へ人々が足を踏み入れない、本当の理由を。

この山で起きたことは私とこの馬しか知らない。決して口外しないと約束したから。しかしそれはいつまで秘密にしていればいいのか。一年後だろうか、十年後だろうか、それとも一生？

——この山に神がいるのなら、どうしてあの時助けてくれなかったのだろうか。

少女は俯いて溜息を吐いた。

「帰ろうか、焰^{えん}。もうすぐ日が暮れる。」

そう声をかけると、焰と呼ばれた馬は返事をするように短く口を鳴らしてから大人しく方向を変えた。歩き出したその姿を、夕日が赤く照らした。

人々はこの山に神がいるのだと信じている。

しかし彼女は知っている。この山に神はいない。ここにいたのは、暗くて禍々しい空気を湛えた「鬼」だけだということを。

家についた頃にはすっかり日が暮れていた。少女は馬を馬小屋に繋いで、背負っていた弓を小屋の脇に立てかけ、玄関の方へと回った。

彼女が出かけたきり夕方まで戻らないことはしょっちゅうのことであったが、それでも今日は少し遅くなってしまったから、小言を言われるかもしれない。そんな覚悟をしつつ引き戸に手をかけた時、中から何やら賑やかな話し声が聞こえてきた。

「…そう、じゃああなたが噂の颯介君なのね。…」

母の声だ、と少女は思った。しかし一体誰と話しているのだろうか。声の調子からして家族の誰かという訳ではなさそうだ。今この家に住んでいるのは母と自分と妹の三人だけ。数年前に嫁いでいった姉がいるが、帰省するなんて話は一切聞いていない。誰かお客さんが来ているのだろうか。そう考えた瞬間、ひやっとした感覚が背中を通った。

「ところで、例の娘さんは？」

今度は男の声がした。聞いたことのない声だ。ああやっぱり、と、

少女は戸にかけていた手を降ろして溜息をついた。また例の、迷惑な客に違いない。最近城下町から来たという役人がやたらとこの家を、いや、この家にいる少女を訪ねてやってくるようになった。彼らは口をそろえて城へ来いと彼女に言う。その理由は彼女自身も承知していた。いつかそういうことになるかも知れないと、今までに父から散々言われてきたのだから。そしてそれが現実となると、やってきた彼らを母は毎回門前払いした。彼女が彼らについて行くことを拒んだからだ。しかし今回は何故かその来訪者を家の中に入れ、楽しげに談笑している。一体何故だろう。

「そろそろ帰ってくると思うんですけど…一体あの子、何しているのかしら？」

母の声が再び聞こえる。続けて、妹の高めの声が響いた。

「あれ、お母さん見て。馬小屋に焰がいるよ。」

少女はしまったと思った。居間の窓からは馬小屋が良く見えるのだ。焰がいると分かれば、当然共に出かけて行った自分も戻っているということがばれてしまう。役人が家にいる以上、家の中には入りたくない。

「あら本当。」

そんな母の声が聞こえるのと同時に、パタパタと玄関の方に近づいてくる足音が聞こえた。少女は身を隠そうとするが、それよりも早く戸が開いた。姿を見せたのは妹だった。

「やっぱり。お帰り、小弓姉ちゃん。」

「あ、た、ただいま…。」

何となく気まずくて声が上がった。中にいる客が自分のことを探していることを考えて少し緊張していたのかもしれない。妹の千春はそうとは知らず、いつもと変わらぬ笑顔で言った。

「ちょうどお客様が来てるの。お姉ちゃんに用があるんだって。」

少女こと小弓の体は少し強張った。何の用かはもはや聞く必要もない。役人の言うことなんてみんな同じだ。どうでもいい風を装って「ふうん」と適当に相槌を打つと、千春は不服そうに小弓を睨ん

だ。

「なあに、その気のない返事。ほら、とにかく入って。お姉ちゃんのお客さんなんだからね。」

「…どうせいつものお役人でしょ。」

「確かにお役人さんなんだけどね、今日はいつもとちよつと違うの。お父さんのお友達なんだって。」

草履を脱ぎながら千春の話を聞いていた小弓は、「お友達」という言葉に一瞬動きを止めた。

「お友達って…お父さんの？」

「え、うん。お母さんはそう言ってたけど。」

不思議そうな顔をする千春に「そう」とだけ返して、小弓は廊下を歩いた。ゆっくりと、出来るだけ足音を立てないように。今までに経験したことがないくらい緊張していた。

母が対応している客が本当に父の友人なののだとしたら、今まで来た役人の誰よりも厄介なことになるかもしれない。これまでは役人といっても普通の人間であつたから、いざとなれば力ずくで追い払うことも出来るという気持ちの余裕があつた。けれどもし、今日のお客が父と同じ職についている者であつたら…。そう考えると、腕がぞくりと泡立った。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

千春の声で小弓は我に返る。どうやら考え事をしているうちに、居間の前まで来ていたらしい。もともとそんなに大きな家ではないのだから何の不思議もないのだが、小弓には驚くほど短い距離だった気がしていた。千春に心配をかけてはいけないと思い「何でもない」と笑ってみせたが、上手く笑えた気がしない。千春も納得のいかなような顔をしていた。

「本当に大丈夫？ 具合悪いなら部屋に行った方がいいんじゃないの？ お客さんには私から言っておくし…。」

「いいよ。大丈夫、本当に何でもないから。ありがとう千春。」

小弓はそう言った後、一度ゆっくりと息を吸い込んだ。この扉の

先にいる人がもし、死んだ父の同僚、四神の者たちであつたら。

（きつと私は、何かしら覚悟しなきゃならないんだよね。）

小弓の横から千春が手を伸ばし、襖に手をかけた。それがずっと横に滑る。居間の灯りが薄暗い廊下に漏れてきた。

「あら、千春。小弓は帰っていたの？」

母の声がまず聞こえる。小弓の立っている場所はちょうど襖の陰になって、あちらからは小弓の姿が見えないようだ。小弓からも、居間の隅っこに追いやられた小さな行李が見えるだけだった。千春はうんと頷いて中へ入っていく。後に続かなければ不自然だと思つて、小弓は一度大きく息を吸いこんでから緊張気味に顔をのぞかせた。

「ただいま。」

中を覗くと、ちょうど襖の正面の位置に二人のお客は座っていた。一人は二十代後半と思われる、綺麗な顔をした、けれど少し怖そうな男性。もう一人は小弓とそう年が変わらなそうな青年で、左目の下に泣きぼくろがあつた。目が合つた瞬間、二人の表情が少し険しくなつたのを小弓は感じた。肩が小さく揺れるが、手に力をこめて逃げ出したくなるのを何とか抑える。

「おかえりなさい。ずいぶん遅かつたのね、どこへ行っていたの？」

母のお幸は穏やかに、しかし少しだけ咎めるような口調で言つた。小弓は苦笑いしながら一步居間の中へ入つた。

「別に特別な所には行つてないよ。ただちよつと、焰と散歩をしていたら遠くまで行っちゃつたの。遅くなってごめんなさい。」

「そうなの。まあいいわ、今日はお客さんもいることだし、細かいことは聞かないわね。十和さん、颯介君。長旅でお疲れでしょう、今日は泊まって行つてくださいね。今お食事お持ちしますから。」

お幸はそう言つて立ち上がった。小弓はその言葉に驚いて母を見つめるが、母は気付いているのかいないのか、小弓の方を見ようとはしない。十和、という名前が、小弓にはどうにも気になつた。いつか父にきいたことのある名前だ。

「すみませんお幸さん。世話になります。」

綺麗な顔の男性がそう言って頭を下げた。それに続いて彼の隣の青年も同じように礼を述べる。小弓はそれをなんとも複雑な気持ちで眺めていた。

彼が本当に十和という名前なら、父の友人というのは確かに間違っていないのだろう。家でもよくその名前は耳にしていた。しかし十和という人物は、小弓の記憶が正しければ鬼守という役職に就いた人間であつたはずである。四神の人間がわざわざ出向いてきたということはやはり、小弓はある程度の覚悟を強いられるということだ。母もそれを、わかっていないはずはないのに。

「ほら小弓、そんなところに立っていないで中に入っていらっしゃい。千春、お膳を運ぶのを手伝って。」

お幸は小弓の隣まで来て、ポンと肩を叩いた。小弓は母の顔を見たが、母はただ微笑み返してくるだけだった。

「お母さん…。」

どうして、と、その後に続く言葉は出てこなかった。どうして分かっていくせに、この人たちを家に泊めたりなんてするの。

コノ人タチ、私ヲ殺ソウトシテイルカモシレナイノニ。

その瞬間、小弓の体はびくりとはねた。はつきりと言葉にして考えたたん、それこそが真実のような気がしてならなかった。小さく頭を振って嫌な考えを打ち消すと、小弓はゆっくりと腰を下ろした。二人の客人と向かい合う形になる。二人がこちらを見ている気配はひしひしと感じていたが、どうしても顔を上げる気にはなれなかった。

彼が本当に十和という名の鬼守ならば、彼がやってきた理由はただ一つ。彼が用があるのは友人の娘としての私ではない。鬼の娘としての、私だ。

ごくりと喉が鳴った。確かに彼は父の友人であつたかもしれない。けれど、もう父はいない。そして彼は鬼守というお上の役人なのだ。敵ではないと言ひ切れない。しかし真正面からぶつかつていったところで自分のような小娘に適う相手ではないことは火を見るより明らかであつた。

どうしよう。

そんな言葉が小弓の頭の中をぐるぐる回っていた。

五話

夕食の準備の為、お幸と千春が居間を出て行く。残された三人の間には気まずい沈黙が流れた。もつとも気まずいと感じたのは小弓だけだったかもしれない。いたたまれないこの状況を何とかしようと、小弓はとりあえずお辞儀をした。

「…小弓と言います。初めまして。」

すると正面にいた少し怖そうな男性は、綺麗な顔にやはり綺麗な笑みを浮かべた。彼は小弓が今まで見たことがないほど整った顔をしている。笑うと尚更だ。いつもニコニコしていればいいのに、と、小弓は場違いなことを考える。

「初めまして、俺は十和だ。こっちは颯介という。」
「どうも。」

十和の紹介をうけて、颯介と言われた少年は一度頭を下げる。泣きぼくろの彼もまた一般的にはなかなかの顔をしているのかもしれないが、十和の隣にいては平凡に思えた。まるで女性のもののようにまっすぐに綺麗な長い黒髪が小弓には羨ましい。小弓の髪は茶色で光に当たると赤くなり、おまけに癖っ毛であった。

「鬼の目…。」

不意に颯介が呟く。小弓はドキッとして動けなくなった。鬼の目、それは普通の人間とは異なった、縦長の瞳孔の猫のような目である。小弓の目はまさにそれだった。膝の上で握りしめた手に力が入る。どうしよう、こういうときどんな態度をとったらいいのだろう。

「おい颯介、やめてやれ。小弓が怯えてるぞ。」

十和がそう言って颯介をたしなめる。小弓が恐る恐る顔を上げてみると、呆れた顔をした十和と、少し慌てたような表情の颯介が目に入った。

「あ、悪い。つい癖で…。別に怖がらせようとした訳じゃないんだけど。」

「癖？」

小弓が首をかしげると、颯介はにっこり笑って頷いた。とても人懐っこい笑顔だ。

「俺、風守だからさ。鬼とかそういう類のものには一応敏感で、ちよつと険しい顔になったりするんだよな。」

さらっととんでもないことを彼は言う。何から突っ込んだらいいのか分からなくて、小弓は思わず、じつと颯介の顔を見た。風守。この人が？信じられないという気持ちが顔に出ていたらしい。颯介は少し不服そうな顔をした。混乱しかける頭を整理してから、再び小弓は口を開いた。

「あなたも四神の人だったの。」

「も、ってことは、十和さんが四神の一人だって知ってたのか？」
「名前だけは。父がよく話していたから。十和さんは、鬼守なんですよね。」

そう言った後で、よくよく思い出してみれば颯介の名前も聞いたことがあるかも知れないと思った。火守の後継者として最年少の少年を四神に招き入れたのは父だと聞いたことがある。その時に名前くらい聞いていてもおかしくはない。

「小弓、一つ聞きたい。」

小弓がかつての父との記憶を思い返していると、ふいに十和がそう言った。やけに真剣な顔をしている。小弓の心臓は再び嫌な予感に震えた。

「…何でしょう。」

「お前は、俺のことを弓親から聞いた、と言ったな。どの程度聞いている。」

「どの程度って…。」

小弓は答えかねて俯いた。この人は何を聞きたいのだろう、という疑問が頭を占める。別に何でもない質問なのかもしれないが、今の小弓にとっては彼らの全てが自分を不安にさせる原因であり、警戒すべき対象であった。これを聞くことで一体何を聞き出そうと

しているのだろうか、と疑わずにはいられない。掌に嫌な汗をかいているのに気がついて、小弓は膝の上で出来るだけ強く手を握りしめた。

「父は十和さんのこと、親友だと言っていました。それから…」

——何かあったら、十和を頼るといい。あいつはお前の味方になってくれる。

ふいに父の生前の言葉を思い出して、小弓は口を閉ざした。あの言葉を言われたのは一体いつのことだっただろうか。確か小弓の出自に関する話をしたときだったと記憶している。するともう5年以上前の話になるのかと、小弓は心の中で驚きの声をあげた。まだ10歳を少し過ぎたばかりの幼い小娘にあんな話をした父にも驚くが、そんなに前に言われた言葉を鮮明に覚えている自分にも驚いた。あの頃は何故「俺に頼れ」と言ってくれないのだろうかと少しばかり寂しさを覚えたが、十和という人物については少しも疑いを抱いてはいなかった。ただいつか——そのいつかはきっと万が一にもやってこないものと思っていた——自分の力ではどうにもならない事態に陥った時には、その十和という人が手を貸してくれるのだと、漠然と信じていた。

しかし、その頃と今とでは状況が違う。あの頃は隣に父がいた。けれど今、父はいない。2年前に小弓の目の前で死んでしまったのだ。そう、2年も前に。それが、小弓が十和たちを信用しきれない理由であった。2年というのは、決して短い時間ではないと思う。少なくとも親しくしていた故人を偲びにやってくる時間くらいはいくらでも作れただろう。確かに火守という立場であった父の死は未だ世間に公表されていないというのが現状だけれども、鬼守という立場である彼なら父の死を知らなかったはずはない。それなのに手紙の一つも寄こさず2年間知らん顔をしておいて、今更小弓に用が

あるなどという。これはもう、幕府の命令で来たとしか思えない。殺しに来たのか捕えに来たのか知らないが、小弓にとってはどちらも同じことだ。

突然黙ってしまった小弓に疑問を抱いたのか、颯介は少しだけ身を乗り出して小弓の様子を窺っていた。それが視界の端に入ったことで小弓ははっと我に返り、心に抱いている疑惑の念を悟られぬように前を見据えた。

「どうした。なんか、急に黙り込んだけど…。」

「いえ、何でも。父は、お二人のことをよく話していました。他の何を話している時よりも楽しそうに。」

「やっぱりなあ。弓親さん、十和さんのこと大好きだったもんな。」
颯介はにっこりと笑って、嬉しそうにそう言った。きつとこの人も父のことを好いてくれていたのだと、小弓は何となく感じた。さつきから父の話題が出ている間は心なしか優しい顔をしている。

この人たちなら、という考えが突然頭の中に湧き上がった。父が大好だった、そして父のことを好いてくれたこの人たちなら、もしかしたら信じられるのだろうか。父が信用していたこの人たちなら…。しかしやはり、2年という空白の時間が小弓を躊躇させた。（もう、いいや。なんか考えるの面倒になってきちゃった。）

元来、小弓の頭はあまり難しいことを考えるのには向いていない。考えても分からないのなら聞いてしまえばいいのだ。もしそれで彼らが自分の味方ではなかったとしたら、どうするかはその時に考えればいい。そう考えて一つ大きく息を吸うと、頭の中がすっきりしたような気がした。

「あの、私も一つ聞いてもいいですか。」

「…何だ。」

不思議そうな顔をして、十和と颯介がそろって小弓の顔を見る。慣れない視線に戸惑いつつも、小弓は膝の上の掌を握り直して密かに気合を入れた。

「父が死んでからもう2年経ちます。その間、あなた達からは何の音沙汰も無かった。それなのに、今になって私を訪ねて来たのは何故ですか。捕まえておくため？それとも殺してしまうため？」

今度は二人が戸惑う番だった。余りにも単刀直入な物言いに驚いたのかもしれない。小弓は少しだけ胸がスカッとした。

「知っていたのか、命を狙われていること。」

十和は少しだけ悲しそうな顔をした。自分の所為ではないのに、何故だか申し訳ない気がする。小弓は小さく頷いてそのまま俯いた。

「父が少しだけ、そんなことを言っていたし…。それにここところ、城下から何人も役人が訪ねてきました。鬼の娘を差し出せって。」

「役人が何人も？十和さん、それって…。」

颯介の真剣そうな口調に、小弓は顔をあげて二人を見比べた。颯介もやはりじつと十和の顔を見つめている。二人に見られている当の本人は、いたって真面目な顔で腕を組み、ううむ、と唸っていた。

「ああ、おそらくは大御所側の者たちだろう。紀臣は俺達より以前にはここに人を送っていないはずだ。」

「大御所…？」

「上様の父親だよ。あそこの親子はすっげー仲悪くてさ、お前の命を狙っている大御所様に反発して、上様はお前を保護しようとしているんだ。で、俺たちは表向きはその上様の命令でここに来た訳なんだけど…。」

首をかしげる小弓に、颯介は簡単に説明した。大御所と現將軍の中が芳しくないことはさすがに小弓も知っていたが、まさか自分を巡ってまで対立が起きているとは思わなかった。国を統治する人間にとっては自分のような存在は邪魔なだけなはずだ。命を狙おうとする大御所の考えはもつともが、何故、上様は保護しようと考えたのだろう。ただ単に、大御所と同じ意見を述べたくないだけなのだろうか。

上様が何を考えているのか尋ねようと口を開きかけた時、小弓は

颯介がまだ十和の方をじっと見ていることに気がついた。そういえば先程の言葉も語尾を濁していた。

「他にも何かあるの？」

そう聞いてみると、今度は十和がちらりと颯介を見た。二人が交わす視線の意味は小弓には分からないが、二人はお互いに頷きあって意思の疎通を図っているようだった。何か仲間外れにされているような、なんとも言えない居心地の悪さを感じる。

「何かあるのは十和さんだよ。俺も詳しくは知らねえけど。十和さん、さっさとその用事っていうの、済ませちゃったら？」

颯介は頭の後ろで腕を組んで拗ねたように言う。何がなんだか良く分からないまま、小弓はそんな颯介の様子に首をかしげた。さっきから薄々感じてはいたが、この人、どこか子供っぽい。風守などと言うからにはもう少し大人な雰囲気期待していたのだが、どうやら小弓の思い込みに過ぎなかったようだ。そう言えば父も火守などという立場にありながら、ちっとも大人の雰囲気を持つてはいなかったな、と今更ながらに思い出す。

そんなことを考える小弓の正面では、十和が懷に手を入れて何かを探っていた。黙って見ていると、彼はやがてひと振りの小刀を取り出す。それは腰に差すには余りに短く、武家の女子が懷に忍ばせるくらいの長さの小刀で、柄の先の部分には赤い紐の総が付いていた。男が持つには少し不釣り合いに思われるそれを、十和はゆっくりと小弓の方に差し出した。

「お前の物だ。弓親から預かっていた。」

「え？」

「俺がお前に会いに来たのは、弓親との約束があったからだ。弓親の身に何かあったら、あいつに変わってお前を守る。そう約束していた。」

小弓は差し出された小刀を躊躇いっつも受け取った。拵えは木製の何の飾り気もないものだったが、それがかえって赤い総を際立たせている。赤は父の好きな色で、そして小弓も好む色だった。まじ

まじとそれを見ていると、すっかり忘れていた出来事を思い出す。

「お父さん、覚えてたんだ、あの約束。」

呟いた声は思っていたよりもずっと小さかった。

弓親がなくなる一年ほど前、小弓は彼と共に家の裏にある山に出かけた。弓の稽古をつけてもらうためだった。小弓は幼いころから弓親に弓を教わっていて、稽古のときは決まって裏山でというのが二人の間の決まりごととなっていた。近くにある木から枝をとって做的にするのが常で、その日もいつものように弓親が準備を始めた。その際に弓親が使っていた小刀を小弓が羨ましがったのだ。

『いいなあ。お父さん、私もそういう小刀が欲しい。』

『小刀あ？そんなもん持ってた？どうするんだ。お前は力が弱いんだから、刃物は向かないぞ。ましてこんな短いの。』

『別に武器として欲しいんじゃないよ。武器なら私には弓があるもん。そうじゃなくて、こうやってちよつとしたことに使えるの、便利だなあと思ったの。ね、それ貰っちゃダメ？』

珍しく物をねだる小弓に、弓親は少し困ったような顔で笑った。

『全く、仕方ねえな。』

『えっ、じゃあくれるのっ。』

『だーめ。』

からかうように小刀を持ちあげて、弓親は小弓の手が届かないようににした。小弓が「えー、」と不満の声をあげれば、弓親はそんな小弓の頭をくしゃっと撫でて優しい顔で笑って見せた。

『そう不貞腐れるな。どうせならお前にはこんなお古じゃなくて、新しいのを買ってやるよ。』

『本当？』

『俺が嘘吐いたことがあったか？』

『小さい嘘なら沢山ついてるじゃない。』

そう言い返すと弓親は豪快に笑って誤魔化していた。

それからは小刀の話など一切せず、小弓自身もそんな約束はすっかり忘れていたというのに、弓親は忘れずに新しい小刀を用意してくれていたのだ。しかもそれをわざわざ十和に預けて、確実に小弓と接触するように仕向けたのだろう。少しでも十和が小弓を気にかけてくれるように。なんだか無性に泣きたくなった。

「十和さん、どうもありがとう。これ、今まで持っていてくれて。」

そう素直に礼を言くと、十和は穏やかな笑顔を見せた。

「礼を言われるほどのことじゃないさ。それは俺が持っていて仕方がない物だからな。」

「っていうか、早く渡さないと弓親さんが化けて出てきそうだな。」

冗談めかして笑いながら颯介はそんなことを言う。小弓も一応笑顔は作ってみたものの、あの父親ならばそれもあり得るかもしれないと思って頬が引きつった。十和も同じように思ったようで、眉間にしわを寄せて苦い顔をしている。今日初めて会った人が、ある一人の人間に対して同じ見解を持っていることが何だか不思議な感じがして、小弓は少しだけ頬を緩めた。

「まあ、そんな冗談はどうでもいい。…小弓。」

十和は一つ咳払いをしてから改めて小弓を見る。小弓は首を傾げた。

「済まなかったな、来るのが遅くなって。弓親が死んだ後、後継者だ何だと忙しくなってなかなか来られなかった。言い訳にしか聞けないだろうが…。お前が不審に思うのも無理はない。」

そう言って、深く頭を下げる。すると颯介まで続いて小弓に向かって頭を下げた。小弓は突然の謝罪に戸惑い、慌てて二人の頭を上げさせた。

「ま、待って下さい。謝る必要なんて…。私こそ、失礼な態度をとってごめんなさい。」

しゅんとうなだれた小弓に対し、二人は顔を見合わせてから口元に笑みを浮かべた。

「失礼なものか、お前を失礼と言うなら颯介はどうするんだ。無礼者以外の何者でもないぞ。」

「いやいやいや。その対比、おかしくない？この俺を捕まえておいで無礼者って何さ。」

「自覚がないなら重症だな。全く、少しは小弓を見習って見たらどうだ。慣れない敬語も頑張って使ってるんだぞ。」

「…え!？」

二人の漫才のようなやり取りを傍観して笑いをこらえていた小弓だったが、十和の発言に思いがけず驚きの声をあげる。それと同時に囲炉裏の火がパチンと弾けた。灰が小弓の手にかかり、その熱さにびくつと体が跳ねる。「あつっ」と声をあげると、目の前の二人は「ああ」と声をそろえた。

「大丈夫か、チビ。」

言葉の割にのんびりと颯介が尋ねてくる。誰がチビだと思いつつ、小弓は首を縦に振った。手を見ると甲の真ん中辺りが少し赤くなっている。

「あんまり興奮して前に乗り出すからだ。」

「そ、それより何ですか、慣れない敬語って…。」

十和にやんわりと窘められたが、そんなことは気にならない。二人とももう少し心配する振りだけでもしてみたらどうなんだと非難の視線を送りながら、小弓は先程の十和の発言を言及した。確かに敬語なんてあまり使わないが、慣れていないと思われるほど拙かったのだろうか。それでも頑張ってみた方なのに。

そんな小弓の視線をものともせず、颯介はにこりと微笑んだ。

「え、ばれてないと思ってた？」

バレバレだぞ、と妙に可愛こぶって言う颯介に苛立ちを覚えるのは当然のことであった。もうこいつには敬語なんて使ってやらないと小弓は固く心に決める。ちらりと十和の方を見れば、颯介を窘め

るどころか数回頷いて同意の意思表示をしている姿が目に入った。

（こっちもか。）

小弓は大きなため息を吐いた。今まで頑張っていたのが馬鹿らしい。さすがに四神というだけあって、観察力には優れているようだった。別に見破られたのが悔しくてそう思うことにしようとか、そんな風に思った訳ではない。断じて違う。

「もう、いい。手を冷やして来よう…。」

「ああ、跡が残らないようにしろよ。」

十和の言葉には「いい」と返事をして立ち上がり、小弓は居間を出て家の裏手にある井戸へと足を向けた。

家の裏手へ回るには、ここからならば納戸から外へ出た方が近い。小弓はそう思って勝手口のある台所ではなく家の一番奥にある納戸へと歩いていった。廊下は灯りが灯してはあるものの、納戸の方まで来るとさすがに暗い。しかしこの暗さが今の小弓にはちょうど良く、心が落ち着いていた。緊張していた為か肩が疲れている。ため息が一つこぼれた。無意識のうちに火傷した右手をさすった。

「…良い人たち、なんだろうな。」

小さな火傷程度でも一応気にはかけてくれた。半分呆れているようにも面白がっているようにもみえたけれど、彼らのあの言葉を、あの振る舞いを、演技だとは思いたくない。小弓は懷にしまった小刀に着物の上からそっと触れた。

「大丈夫だね、お父さん。お父さんが任せるくらいだもん…。」
彼らを信じてみよう。小弓はそう決意して、再び小さなため息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5057o/>

四神御伽草紙

2010年11月2日01時10分発行